

書叢のものはつ

534

特279

特279-421

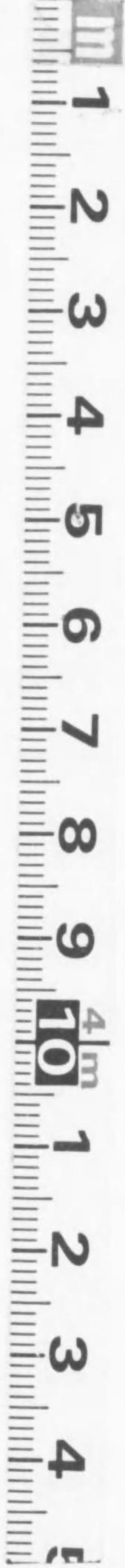


*76W11029 *

納本

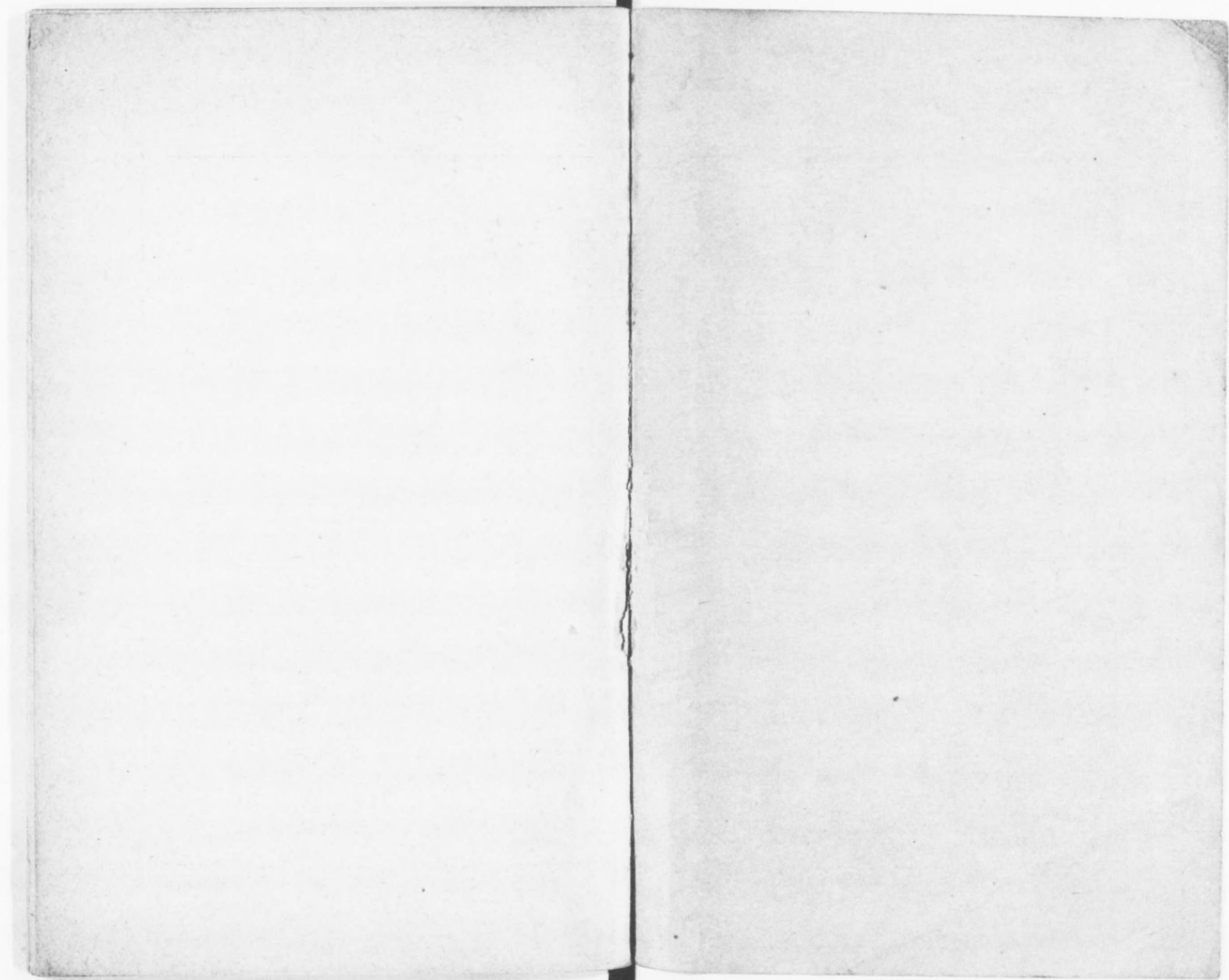
兵士と母

部輯編のものはつ省軍陸



始





叢書の趣旨

「つはもの叢書」は皇軍のつはものに対する特種異風の指導書たると共に國民大衆の爲にも亦親切なる心の糧である。小説、稗史、講談、物語等何れも好んで愛讀親昵し得る中に自ら深く教ふる所あるべきを期してゐる。

世は方に國を擧げての非常時、國民精神の作興は刻下の急務であるが、國民の中堅たる皇軍のつはものは愈々堅確なる思想と精神とを以て全國民の儀表となり、又信賴の的とならなければならぬ。

本叢書はこの重責を以て日夜奉公の誠を致しつゝあるつはものゝ爲唯一の侶伴たると同時に一般國民精神作興の指針でもある。

各篇いづれも六ヶ敷い論説や理屈を避け、平易にして面白く而かも一貫したる指導精神の下に編輯せられあることを特色としてゐる。

價額極めて低廉なるが故に全軍のつはものほもとより之が廣く天下に普及し全國を風靡せんことを欲して已まざるものである。

陸軍省つはもの編輯部



と
母



陸軍省つはもの編輯部

此の書を總ての母たる
人竝に母たるべき人に
捧ぐ

76W11029



目次

兵士ミ母(序に代へて).....	一頁
出征に際し祖先の靈前につはもの、覺悟を訓ふる母.....	一五
昭和の「一太郎ヤイ」.....	一九
我が子の遺骨を迎へて.....	二二
「死んで親に名譽を残してくれた」に感激する勇士の母.....	三五
「私は泣きます、人様のゐない所で」.....	三七
負傷した我が子に「様づけ」する母親.....	三三
母の弔電.....	三三

母親を懐ふ勇士の遺書……………三三

母の遺言に勵まされて勇躍する軍曹……………三五

◇母を懐ふ兵士の歌……………三六

◇陣中母を懐ふ古歌……………三八

「母は遺骨を待つてゐます」ミ白装束を送る……………四四

我が子の身代りに立つた母親……………四六

戦場の愛兒に父の死を秘むる母……………四八

高橋上等兵の母……………五一

死に直面して我子を勵ます母……………五三

在隊間の零細な貯金を青年訓練所に寄附した現役兵ミその母……………五九

危篤の母を残して演習に應召……………六一

母の死に歸らぬ出動間際の兵士……………六三

母の激勵に戦場の花ミ散る……………六五

「母は覺悟してゐます、人におくれを取るな」……………七〇

父の死を秘す涙ぐましい母親の心事……………七二

母の乳房に甦る傷兵……………七四

條理を盡した息子の手紙ミ健氣な母親……………七八

自分の寫眞を送らぬ母……………八〇

此の母にして此の子あり……………八二

親を氣にするな、運を天に任せて戦へ……………八六

女労働者になつて子を勵ます母……………八七

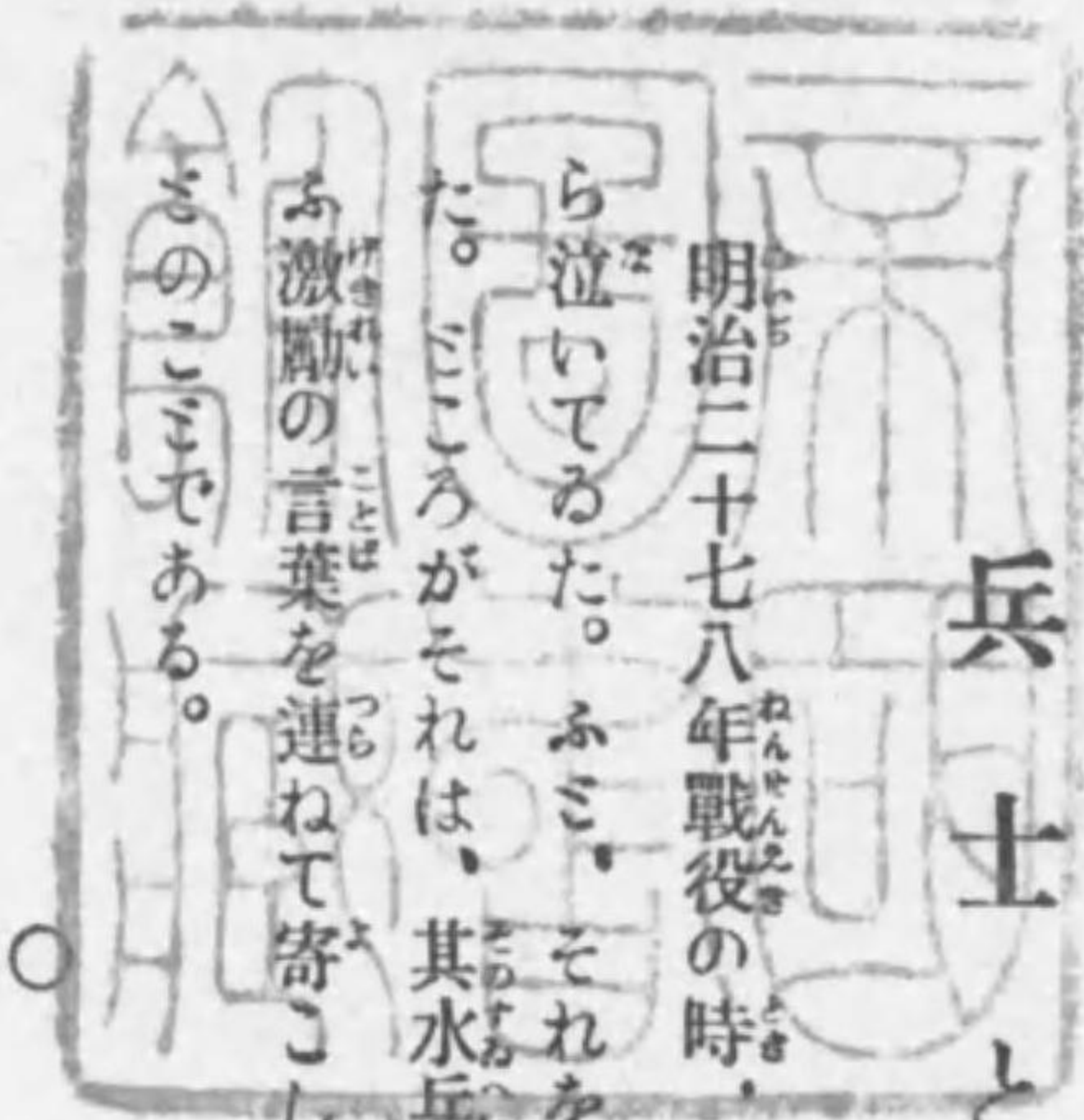
男まさりの「海軍のおばさん」……………八九

萬人力お守の「兵隊婆さん」……………九四

全身熱こ血！「兵隊の小母さん」……………九六

第一線を慰問した兵隊婆さんの感想……………一〇四

兵士と母 (序に代へて)



明治二十七八年戦役の時、軍艦高千穂の一水兵が或日女手の手紙を読みながら泣いてゐた。ふと、それを見た某大尉は、め、しい振舞だこいつて彼を吐つた。さうしてそれが、其水兵の母から「お國の爲だ、一命を捨て、働け」さういふ激励の言葉を連れて寄こした手紙であつた。判つて大尉も感激の涙に暮れたさうである。

明治三十七年の八月二十八日、丸龜の部隊が旅順へ出征する爲、多度津の港を出帆せんこするこき、海岸に集つた多くの見送人を押し分け押し分け前へ出て来る一人の老婆があつた、年の頃六十四五で、腰には小さな風呂敷包を結び

つけ、息せき切つてゐる。

其時、出征兵士を満載した御用船は、既に岸を離れて動き出してゐた。老婆は之を見るや大聲をあげて「一太郎やあい、其船に乗つてゐるなら鐵砲を上げろ——」と叫んだ。するに甲板の上で鐵砲を上げた者がある。老婆は再び聲を限りに叫んだ。

「うちのこは心配するな、天子様によく御奉公するだよ、わかつたらもう一度鐵砲を上げろ——」

するに又鐵砲を上げたのがかすかに見えた。老婆はやれ／＼と叫んで、其場へ坐つて了つた。

この光景を目撃した周囲の人々は、何れも云ひ知れぬ感激に打たれて自ら涙するのであつた。同じく其傍らにゐた、時の香川縣知事小野田元熙氏は、思はず「お婆さん、戦争は大勝利ですぞッ」と目を潤ませ乍ら呼びかけて懇ろに其

老婆を勞つた。

○
この二つの話はいづれも小學讀本に掲げられて、幼いものに強い感激と教訓を興へてゐるが、この種の物語りは猶幾つも残されてゐて、幾多の「水兵の母」「一太郎やあい」の主の誠心は、何時の代の母の胸にも宿つて強き日本の力になつてゐるのである。

「お婆さん、戦争は大勝利ですぞ」をいつて一太郎の母を慰めた小野田知事の言葉は、決して單なるお世辭ではない、かゝる健氣な母がある限り日本の兵隊は決して敗けない、必ず大勝利を得るのだといふ確信を語つたものである。

○
滿洲事變に於ても出征兵士に對する母の心と態度とに變りはなかつた。これは日本の母が有つ共通の心持であらう。

「あこは心配せんでもよい、母はこんなに元氣たぞえ」息子の門出に桑の切株を投げては見せ、投げては見せた母もあつた。

日頃優しい、涙もろいさばかり思つてゐた母親が、門出に示したこの毅然たる態度は、勇士が二十数年の今日までに初めて見た、母の雄々しさであり、犯し難い尊嚴さであり、そこには譬へ様もない絶大なる愛の潜んでゐるこゝしを知つたであらう。

唯一人の頼り手さしてゐた息子を戦地へ送つて、あこに寂しく残された老母が、

「お國の爲に立派な働きをしておくれ、母はお前のお骨の著くのを待つてゐます」こいつて、白装束の着物を送つたこいふ話もある。

大義の爲に俗望を捨て去つた母の覺悟は、佛の如き大慈悲に立ち還つて悲壯さいはんよりは寧ろ壯嚴である。

或る兵は家郷に残して來た貧しい老母の上を心配して、幾分の補助にもこゝし、戦地から若干の金を母に宛て、送つた。こゝろが老母は喜んでくれたと思ひの外、次の手紙で

「一度身々君國に捧げた者が、何故家族のこゝしなご考へるか、今後は決してさういふ事をしてはいけない。お前が一生懸命君の爲、國の爲に働いてるれば、神様や佛様は決して其家族を悲惨な目にはお遇はせはせぬのだ」

さ、厳しく戒めて來た。これ等母の印象や誠心は、戰場に於て日毎夜毎に勇士達を慰めたり、勵ましたり、又時に鞭うつたこゝしであらう。

受益店で戦死した米山部隊の小野田利昌上等兵の手帳には次の様な文字が書き遺されてあつた。

「こゝろだ！ 旭川驛へ發つ時、お母様は僕を笑つて送つて下さつた。そして立

派に戦死して白骨になつて歸つたら家へ入れるが病氣や捕虜にでもなつて歸つたら家には入れぬと言はれたのだ。お母様は七十の老體で俺の寫眞を持つて上川神社に日参するこのころ、俺はさうしても見苦しいころは出來ぬ。

さうだ、彈丸の中で死なう。いや死ぬ許りではないかん、俺に與へられた任務に全力を盡すことだ。ようし俺はお母様の御言葉に對し、全精神を以てお答へするここにしやう。大君の爲働くのだ」こ。

○
新しくして母の尊く氣高い魂は遠く戰場に在つて砲煙彈雨の中に働く兵士の胸に乗り移り最も力強い活動をしてゐるのである。

或兵は彈丸にあたつて死ぬ瞬間「お母さん！」と叫んで殞れたといふ。
野戦病院に呻吟する重傷者が、うは言に「お母さん」を呼ぶこころは決して珍らしいこころではない。

「天皇陛下萬歲」を唱へて斃れた兵が、其後暫くでも意識を有してゐるこ、必ず思ひは遠く故郷へ走り、母の胸に抱かれんこころを夢見るのを常とする。之が人情である。

母は何人にまつても、最も偉大なる魅力である。
生くるも死ぬるも、母は常に其身につきまこひ、之を左右する。

露に寝ねて三度夢みぬ母君が
我武あがれ祈り玉ふを

唐國の野山に伏せる此身より

母の心ぞおもひやらるゝ

○
之は戰場に於ける勇士の其母に對する感懐である。

斯く慕ひ、かく愛される母は、戦場の兵士等にまつては、こよなき守護神である。

彼等は出来るこゝこなら、母の寫眞や肌身離さず抱いて活躍したい願つてゐる。だが女々しいと思はれるこゝこを虞れ、或は、母から「自分に氣を引かれては困るから」こゝこ、拒けられて、其願ひは達せられてゐないらしい。

熱河作戦の時、或兵は戦場で大便を催し、附近の物蔭で用を足し、終つて尻を拭はんこしたが、連日の戦鬪行動で紙なごは所持してゐなかつた。辛じてポケットの隅から一通の手紙を見附け出し之を以て拭はんこしたが、何氣なく讀み出すこゝこ、それは懐かしい母からの手紙であつた。

其兵はハツコ思つて之を押し戴き、そのまゝ再びポケットの奥深くへしまひ込んで、結局傍らに轉つてゐた石ころで拭ふて用を濟ませたこのこゝこである。

母を慕ふ心は女々しいこゝこいはんよりは、人間の眞情の發露であり、此上なきゆかしいこゝこである。これによつて兵士は戦場の殺伐なる境に立つてゐてもよく人間の美しい情味を保持し、日本軍獨特の眞價と面目を發揮するのである。

任務の爲には數十倍の敵も恐れず、鬼神の如く奮戦する勇士も、戦場で傷ついた敵の兵に對しては温情を以て之が介護を厭はず又哀れなる避難民等に對しても涙を以て接するので、汚い異國の老婆を恰も己が母の如く勞はり取扱つたこゝこ例なきも少くはない。

絶大なる愛に満てる母の魂を抱いて、戦場に活躍するこゝこの出来る兵士は幸せである。

彼等は最高の信頼と安心を以て、喜んで死んで行くこゝこが出来るのである。

如何なる英雄、偉人（いへんと）も、其母（そのはは）よりは偉くないといはれる。母は總ての場（ば）合（あ）に其子の一切（いっけい）を許し之を完全（くわんぜん）に包容（ほうゆう）してくれる。誠（まこと）に母は、神（かみ）に次（ついで）での唯一（ゆいいつ）の偉大（わたい）なる存在（そんざい）である。

○

愛する我子（わがこ）が、重傷（じゅうきやう）を負（お）ひ又は名譽（めいよ）の戦死（せんし）を遂（と）げた時（とき）、其の母の悲嘆（ひたん）はもこより察（さつ）するに餘（あま）りある。然（しか）るに其場合（そのばあ）に於（お）ても多くの母は、涙（なみだ）一つ見（み）せず、『よくお國（くに）の爲（ため）に死（し）んでくれた』と雄々（ゆうゆう）しい態度（たいど）を示（し）すのである。之は單（たん）なる見榮（みえ）や外聞（がいぶん）を繕（つくろ）ふた態度（たいど）ではない。況（ま）して人間味（じんげんみ）を失（う）つた虚勢（きよせい）なきでないことは勿論（もちろん）である。個人（こじん）の心情（しんじやう）からすれば、自（みづか）らの身を焼（や）いて殺（ころ）すよりも辛（つら）いであらう。それにも拘（か）らず『よく死（し）んでくれた』と觀念（くわんねん）し、或（ある）は『こんな嬉しいことはない』とさへいつて満足（まんぞく）するところには、日本（にほん）の兵士（へいし）の母（はは）にして誠（まこと）に尊（た）ぶべき覺悟（かくご）と矜持（きんぢ）とを有（あ）するからである。

如何（いか）に雄々（ゆうゆう）しき母（はは）も、愛兒（あいじ）の死（し）に直面（じつめん）して涙（なみだ）なきものはないであらう。或（ある）る戦死者（せんししや）の母（はは）は述懐（じゆくわい）してゐる。

「他人（たに）様（さま）は何か（なにか）と而倒（めんたう）を見て下（くだ）され、一日（いちにち）も早く忘（わ）れる様に（やう）に色々（いろく）とお慰（なぐさ）め下さいます、親（おや）は自分（じぶん）の命（いのち）のある限（かぎ）り忘（わ）れることは出来（でき）ません、私（わたし）は泣（な）きます。未（ま）だ一日（いちにち）も泣（な）かぬ日はありません。……泣（な）けさいふのがほんとうです。だがお人様（ひとさま）の前（まへ）で泣（な）くことはよしませう。お互（たがひ）に息子（むすこ）の譽（ほま）れに傷（きず）がつきます。人（ひと）の居（ゐ）ない時に泣（な）きませう……」

又（また）或（ある）母親（はは）は愛兒（あいじ）の遺骨（ゐこつ）が戦地（せんち）から送（おく）り届（とど）けられて來（く）るや、其骨箱（そのこつばこ）を赤兒（あかて）の如（ごと）く抱（だ）きしめて、あふり落（お）つる涙（なみだ）も拭（ぬぐ）はず聲（こゑ）を慄（ふる）はして、『お・節（いさを）や節（いさを）（戦死者（せんししや）の名（な））、さぞ寒（さむ）かつたらう、辛（つら）かつたらうーなア……よく天子様（てんしさま）の爲（ため）、御國（みくに）の爲（ため）に死（し）んでくれた。私（わたし）もこんな嬉しいことはない。……この次戦争（つぎせんそう）があつた時は、お前は鳥（からす）になつて、もい、から、天子様（てんしさま）とお國（くに）の爲（ため）に働（はたら）いてくれ』さいひ乍（な）ら

泣きくづれたさいふ。

さもあるべきである。だが、そこには一片の愚痴もなく、泣き言もないところ、ろに美しさがある。

まことに此の母にして此の子のりさいふ。昔から聖賢、偉人、英雄の蔭には之を哺み育てた偉大なる母の力がある如く、忠勇無双なる我が日本兵の背後にはこの健氣なる母の誠心と慈愛とがあるのである。

○

眞實の母が其兵に及ぼす力と影響との偉大なるは勿論であるが、尙之に代るべき大いなる力を見逃すことが出来ない。それは婦人のみが持つ「母性」である。

總ての女は、男性に對する女性たると共に更に其胸の奥深くに尊き母性を藏してゐる。女は生れ乍らにして人の母たるの素質と、心とを備へてゐるのである。

る。

戦地に於て或は銃後に於て、所謂「兵隊婆さん」なるものが兵士にまつて何に難有き存在であるかは察するに難くない。

奉天に於ける兵士ホームの「兵隊婆さん」橋本榮子女史が、北滿の守備地を慰問行脚した時、「皆さん、さうぞ親御さんに訴へると同じ氣持で貴方方の母であり姉妹である私達に訴へて下さい、必ず及ぼす乍ら力になります」といつた時、並居る兵士は皆泣いたさいふ、彼等はその母性的愛に感涙して泣いたのである。女史はそれを見て、「私共は慰問して朗かにしてあげようと思つたのに却つて皆を泣かせてすまなかつた」といつて、今度は夕食後皆でタコ遊びをしたり歌を唄つたりして遊んださいふ、其時の兵士等の境地は正に母に抱かれたる幼児の心其儘であつたに違ひない。

大阪の「兵隊の小母さん」といはれる田中トメ女の許へは滿洲の兵士から二千廻に餘る感謝の手紙が來てゐる。

内地からよく、陣中の寂寥を慰める意味を以し美人の寫真等を送つてやるものがある、之等は一應閑居の場合の徒然を慰める役には立つかも知れないが、いざ出動といふ非常の場合に於ては之等は何の考慮も拂はれずに棄てられてしまふ。

戦場の兵士にまつては一時のはかない慰めなきは何の價値もないのだ。彼等

はもつこ眞剣にして切實なるものを求めてゐるのである。純眞なる少女の簡單なる慰問文の一節にも泣かされて、命までも捨て度くなる。況して大なる母性愛の前には無條件に包容され、安んじて身命を賭して君國の爲に活躍するこゝが出来るのである。

あ、尊きは母の誠心であり、偉大なるは母性の力である。

本書は其一端を示す事實の若干を紹介せんとするものである。

『兵士と母』

出征に際し祖先の靈前につはものゝ

覺悟を訓ふる母

國際都市上海の空かけて、戦雲低迷した昭和七年の二月

深い夜の平和を破つて畑山良雄君の家の戸は亂打された、驚いて、戸を開いた母親の手に渡された赤紙は良雄君の召集令状であつた。

母一人、弟四人をその健腕にかい抱いて、僅かばかりの田島に鋤鍬を執つてゐる良雄君の一家であつた。

それでも母親は驚かなかつた。

「さうも御苦勞様でした私の家にも花が咲きます」

急使の者に挨拶した。

母の呼ぶ聲に良雄君初め弟達はびつくりして飛び起きた。晴着を着せられる
こあごけない弟達はキャツ／＼言つてはしやぎ廻つた。

母は良雄君始め一家の者達を静かに佛壇の前に案内した。召集令状は先祖代々
の靈前に捧げられてあつた。

佛壇の正面に坐つて恭しく頭を垂れて母親は祈つた。

「良雄ヤ、お前は此の持佛堂の御靈になつてお呉れ、男に生れて兵役に服した
上は、畏くも天子様に捧げた身だ、死ぬ覺悟で働いておくれ。」

祈願するやうな訓ふるやうな母の言葉は、鐵のやうな良雄君の胸にひしく
喰ひ込んで行つた。

一家の祈りは嚴肅に終つた。

母は良雄君を省みて言つた。

「お前は村の招忠碑にお参りして來なさい。」

「はい」

元氣よく良雄君が立ちかけるに、又母親が云つた。

「良雄、一寸お待ち、何云つて拜みますか？」

良雄君は一寸ためらつたが、すぐはつきりそう答へた。

「私も此の招忠碑のお仲間入りさして下さい云つて拜みます。」

その聲に母は安心した様に大きくうなづいた。

その日、良雄君の出征のさ、やかな祝宴の用意に母親は忙がしかつた。

祝客は朝から良雄君の家につめかけてゐた。

母は大勢の客の中を縫ふて、甲斐々々しく立働しながら、上氣嫌だつた。

客に、一々丁寧に挨拶して廻つてゐる我が子の姿を見遣りながら

「鐵砲彈の中で働くには丈夫でなくては駄目です、幸ひ良雄は人一倍丈夫だからお務めも出来ませう。戦死や負傷は覚悟の前です。」

さすがに、出征軍人の母親らしいほこりこ、意氣を見せてゐた。夢のやうに二三日が過ぎた。

良雄君の出征の日には前夜から降りしきる大雪を踏んで母は佐沼停車場に見送りに行つた。そして大聲で我が子の名を呼びながら

「不幸にして再び故郷に歸る時には、支那人の首の二つも十産に持つて來い、外の土産はいらないよ。」

こ激勵して見送りの人々を深く感動させたこと云ふことである。

因に云ふ、この健氣な母親は、宮城縣登米郡寶江村大字瓦沼新井田の人で、獨立砲兵第一聯隊陸軍砲兵一等兵畑山良雄君の母である。

昭和の「一太郎ヤイ」

滿洲出動の命を受けた、立松少佐以下の飛行隊員が、立川驛を出發せんこした時のことである。

ブラット、ホームにひしめく、見送人の雑踏を押しわけて、列車の窓に背延びしながら、一派遣兵の手を握つて、その首途を激勵する一人の老婆があつた。

「お前のお父さんは、日清、日露の戦争に出て、立派にお國に御奉公を申し上げた、お前も滿洲に行つたなら、お父さんに劣らぬ手柄をたて、くれ。」

木綿の「モンペ」に、縞の羽織もサツパリミ、そこには我が子の出征を見送る心意氣が溢れてゐた。

「これはな、お前へ饑別に持つて來たよ、」

老婆の背負つた風呂敷包から、意外にも唐辛の一束も、真綿の一包が取り出された。

(20)

「さアこれを持つて行きな、滿洲は寒い處だそうだから、お前のお父さんも唐辛を甜めく戦をなさつただ。此の唐辛は今朝島から採つて来たんだから、お前も是を甜めく寒さに負けずに、お國の爲めにしつかり働いてくれ。真綿も一緒にもつて来た。彈丸よけになるよ云ふ話だから……」

子を思ふ一念から、遙々持つて来てくれた母のこの眞心を思ふに、勇士の手はさすがに感激におのゝいた。

「しつかりやつて來ます。お母さんもお元氣で……」

後は涙に曇つて聞ききれなかつたが、勇士の眉宇には強い決心の色が漲つてゐた。

やがて幾多の感激を積んだ汽車は、群集の歡呼に送られて靜かに動き出した。

老婆は次第に小さくなつて行く、勇ましい我が子の出征姿に、息をはずませながら大きく両手を振りながら叫んだ。

「家のこゝは何んにも心配するでない！ お前はただ父に負けない様にしつかりやつてこい。」

見る／＼やせて行く汽車の窓から千切れるやうに軍帽を振る者があつた。

聞けば此の老婆は飛行第一の聯隊第一〇中隊の二等兵佐藤經英君の母親クニ（五十七）さんで、クニさんは、我が子の出征の報を聞くと、取るものも取敢へず、郷里福島から馳けつけて來たのだ云ふ事である。

我が子の遺骨を迎へて

昭和九年の一月末、鹿兒島縣薩摩郡下飯村大字瀬々の浦の事變戦死者陸軍々屬（後備役陸軍歩兵上等兵）宮野節氏の遺族の家へ、鹿兒島縣隊區司令部員佐

(21)

野中佐が、陸軍大臣、師團長等の代理として訪問した時のことである。

その日佐野中佐は、遺骨受領の爲め出鹿した下飯村の助役、節氏の實兄一君
其の他五名の村民と共に、阿久根港を出帆して戦死者の實家に向つた。

一行は黙々として語らなかつた。遺骨は實兄の腕に抱かれてゐた。

やがて舟は青瀬に入港した。港は遺骨出迎への在郷軍人團、村の有志、學校
の生徒達で、うずめられてゐた。

一行は、村民達に禮を述べて、戦死者の故郷に向つた。險阻な山路一里を攀
ぢて瀬々の浦宮野氏の實家に著いたのは、山家の家々に灯が淋しくまた、く頃
であつた。

一行の到着で家の中は急に騒がしくなつた。實兄一氏は直ちに遺骨を花輪に
圍まれた佛前に安置した。

その時、遺族達の中から「お、」と聲をあげて、佛壇の前に走り寄つた一人の

老婆があつた。

老婆は遺骨の前に坐るこ、まるで赤ん坊でも抱く様に自分の胸を開いて、し
つかり遺骨の箱を抱きしめた。

人々は眼を見はつた。

老婆は待ち詫びた様に夢中になつて、遺骨に向つて話しかけた。

「節、節、寒かつたらう、辛かつたらうなア。」

聲は涙に慄えてゐた。頬を傳つて流れ落つる涙が、彼女の懐ろにある遺骨の
箱にしみ込んで行つた。

老婆は戦死者の母親であつた。母親は、ボソ／＼と語り續けた。

「節、節、よく天子様の爲、御國の爲に死んで呉れた。私もこんな嬉しいこと
はない。話に聞くこ、これから又大きな戦争があること云ふことだ。其の時は
お前もさうか鳥になつてでもい、から、天子様さ、御國の爲め働いて呉れ。」

言ひ終るこ、老婆は又、きつく遺骨の箱を抱きしめた。

其處此處から、すゝり泣く聲が聞えて来る。

此の息詰るやうな光景を眼前に見せつけられた佐野中佐は、遺族への挨拶の言葉も忘れて、男泣きに泣いた。

その内に親族の一人が静かに老婆に近寄つて、何か老婆の耳に囁いた。するこ老婆は「ハッ」として振り返つた。やがて、遺骨を佛前にかへして老婆は遺族席におこなしく引下つた。

佐野中佐は、親族一同に向つて、大臣、師團長の慰問の言葉を傳へた。

老婆はその間中、頭を疊にすりつけて、動かなかつた。

佛前には灰色の香の煙が静かに立ち上つてゐる。

「死んで親に名譽を残してくれた」と
感激する勇士の母

冷口附近の激戦に、壯烈な戦死を遂げた、熱血殉國の勇士、故工兵上等兵前

山藤芳君の故郷は鹿兒島縣大島郡大和村字大棚にある。

大棚は奄美大島の一寒村、名勢港から、海岸の小徑を踏んで五里、貧しい農村である。

前山上等兵の家には、六十許りの老父母が、十八歳の弟の細腕に守られて軍事救護を受けつゝ、辛うじてその日暮しに生てゐた。

家が貧しい爲め、前山上等兵も、入營前大阪に出稼ぎして、一家の生計を助けてゐるが、入營後は父母への孝養も叶はなかつた。

五月十九日、大和村の故前山上等兵の實家に、奄美大島要塞司令部員石川少佐が、下村要塞司令官代理として、又荒木陸相、坂本第〇〇團長の名代として慰問した際にも、老母の善千代さんは、病の身を起して

「お、——こんな名譽な事が、私共の生涯に又こあらうか……」

老眼に一杯涙を浮べて、唯感激に打震ふばかりであつた。

彼が出征に際し兩親に宛てた手紙の一節に「俺は出征したら必ず立派に働らいて見せる生きて歸るこは、思つてくれるな」書き送つてゐるこころから見るこ、此度の彼の戦死は、兩親にこつても覺悟の上の出来事であつたらう。

「人間は、百も二百も生きてゐられるものではない。約束された短い一生だ、必ず一度はあの世へ行かねばならないのに、戦地で死んだからこ云つて、大臣様や、師團長様から迄、御見舞下さるなんて、餘りにもつたいのう御座居ます。——藤芳はなんこ云ふしあわせものなんでせう。」

老母は佛壇の新らしい位牌に一寸眼を向けて續けた。

「それにしても、あれが生存中は、天子さまへ忠義を盡し、死んでは又親にこの名譽を残して——ほんこうに藤芳はよくやつてくれました。」

貧しい一家を支へる我が子を奪はれて、國家の尊い犠牲だこは云へ、何こ健氣な心掛けだらう。

慰問に來た石川少佐を始め來合した村の人々も共に、老母のこの言葉に目頭を熱くした。

子を知る親——親を思ふ子皆一途に忠孝の道をしつかり踏みしめて行く。

「私は泣きます、人様のゐない所で」

錦西に向つた古賀聯隊に、糧秣補給の命を受け、錦州を出發した松尾輜重監視隊が、無事任務を果し、折柄襲撃せる敵匪の掃滅にも偉功を樹て、再び錦州

に歸還せんこしたものは、昭和七年一月九日の拂曉であつた。

往途掩護隊として同行した、歩兵小隊を後に残した隊長松尾中尉以下二十五勇士は、その日、錦西、錦州間の虹螺山麓に於て、約六百の匪賊に遭遇して孤軍奮闘、遂に衆寡敵せず全滅の悲運を見たのであつた。

その中の一人に近衛輜重大隊第一中隊高橋高一上等兵がゐる。

高橋上等兵の母堂高橋初氏が上等兵の壯烈なる最後に「家名をあげてくれて誠に家の譽である」と思ふに男々しい決心を示しそれと同時に、つはもの、母としての眞情を見せた手紙を、同じ思ひの他の二十四勇士の家庭に送つてゐる。

左記はその全文である。

初めての御手紙を亂筆にて甚だ失禮の段、悪からず御免下されませ、私は松尾部隊の戦死者故高橋高一の母で御座います。御互様に可愛い息子が、御國

の爲君の爲めに、名譽の戦死を遂げて呉れまして、家の譽れは末代までも消えませんが、靖國神社へ、護國の神に御祭りして戴き、恐れ多き事ながら、上様に拜んで戴き、此の上の光榮はないと思ひます。私ばかりではなく、皆さんの御母さんも同じ心でいらつしやる事と思ひます。又死の如何を問はず、親が子に別れたほごつらひ事はありません。

地人様は何かご面倒を見て下され、一日も早く忘れる様に、色々ご御慰め下さいますが、親は自分の命のある限り忘れる事は出来ません。

私は泣きます。未だ一日も泣かぬ日はありません。他人様の考へに、親の心ごは大變な違ひです、皆さんの御母さん泣きませう。さうぞ皆さんの御母さんも泣いて上げて下さい。

私は泣きます。泣けと言ふのがほんごうです。だが御人様の前で泣く事はよしませう。御互ひに息子の譽れに傷がつかます。人の居ない時に泣きませ

う。私は泣きます。子を持つ親の心に變りはないと思ひます。私は親の一心から毎夜一ト時か二タ時しか寢ずに、別冊の松尾部隊の軍歌を、御和讃を制作しましたが、真に粗末な歌で御座いますが、皆さんの御母さんの元へ御送り致しますから、悪い處は御訂正くださいまして、御若い方は、軍歌にて、御老年の方は、和讃にて二十五勇士の御回向を故高一の母よりお願い申し上げます。さうぞ、皆さん母の一心を御笑ひ下さいませ。

昭和七年四月二十四日

故高一の母 高橋 初

二十四勇士の御母様始め皆々様へ

この手紙と同時に文中にある様に軍歌を、和讃を作つて送つたのである。

負傷した我が子に「様づけ」する母親

一日、東京第一衛戍病院に入院中の我が子を見舞ひに、遙々遠い郷故から一人の母親が訪ねて來た。

そして、白い寢臺上に、傷ついた白衣の我が子を見つけると……出征する時のあの勇ましい面影が、チラミ彼女の眼前を横切つた。今は變るこのいさましい姿……だが、母親は涙一つこぼさなかつた。

恭々しく我が子を伏し拜んで言つた。

「作様や、ようこそお國の爲めに名譽の負傷をして歸らしやつた。母もこんな嬉しいことはありません。お天子様に差上げ申したお前様じや、我が子であつて我が子でないお前様、今日から作様は申しませぬ」
さう云つて母親は、白衣の勇士を伏し拜んだ。

「おつかさん！ 名譽の負傷ですが、この不自由な體を一生面倒を見ておくれ
お願い致します。」

寢臺の上の兵士は泣いてゐた。

「なんのく。そんなこゝは心配いりません。片輪にならうこ、さうならうこ、
お天子様へ差上げたお前様だ。お前様が家へ歸れば、お天子様からお預り申
したも同様、決して不自由な目には合せませぬ。」
そう云ふ母親も泣いてゐた。

母の弔電

遼西の尤家甸子附近の戦鬪に於て、名譽の戦死を遂げた諸勇士の葬儀が、大
石橋で行はれた或日。

讀經も終り、參列の人々の哀痛極まりなき弔詞に、満堂聲なく、唯逝ける勇

士の追惜に胸せまるのであつた。

最後に、故森下一等兵の母から來た電文を、中隊附將校が親代りこして讀み
上げた。

「カワイイヨシヲヨ、アツバレダツタ、ケフマデクロウシテ、オマヘヲソダテ
タカヒガアツタ、ハハワフルサトヨリ、ハルカニオマヘノメイフクタイノル」
急にすゝりなきの聲があちらこちらに起つた。

母親を懷ふ勇士の遺書

受益店の激戦で腹部貫通銃創を受け、鮮血に塗れつゝ、立派な最後を遂げた小
野田利昌君の手帳から、戦友が次の様な走り書を發見した。

四月二日「思出のまゝ」
(上略)

「そうだ、旭川驛を發つ時、御母様は僕を笑つて送つて下さつた。そして立派に戦死して白骨になつて歸つたら家へ入れるが、病氣や捕虜にでもなつて歸つたら家へ入れんぞ言はれた。

そして母様は七十の老體で俺の寫眞を持つて上川神社に日參するこの事、俺はさうしても見苦しい事は出来ん。そうだ、彈丸の中で、否彈丸の中ばかりでない。俺に與へられし任務に對し全力を盡すことだ。

よし、俺は母様の御言葉に對し、全精神を以て御答へする事にしやう。大君の爲に働くのだ。」

また四月十一日の遺書がある。

「我今戦死す。御國の爲めに死するを喜ぶ。

御母上様、御主家御兩親様……御言葉に従つて敵彈に死にます(中略) 御母上様

明十二日は御父上の邊に行きて、くわしく戦鬪の様子を御知せ致します共、御母上様御身體御大切に萬々の御長命の程を祈る。お、嬉しき事か、明日は我が魂も永久に滿蒙の冲天に住み長く日滿平和の爲、ひいては東洋平和のため祈り且守ります。

明日の朝、攻撃に先立つて記す。遺書の通り翌十二日に戦死した。

母の遺言に勵まされて勇躍する軍曹

小樽市在郷軍人會の第七班長田中音松氏より、或日のこゝ熱河戦に活躍する宮本部隊菊地中隊長宛左の書面が届けられた。
拜啓前略……貴中隊軍曹脇本篤次郎殿の實母、三月十一日遂に逝去せられ候間、當分會所屬班員總出にて、葬儀萬端滞り無く終了仕り候。

母を懷ふ兵士の歌

露つるに寝いねて三度みつたび夢見ゆめみぬ母君ははきみが

○ 我武わぶあがれこ祈いのり玉たまふを

勇いさましきはたらさせよこいひさして

○ 涙なみだにくもる母ははのみこここば

かねてよりかくこは思おもひさだめしも

○ 母ははに別わかれの惜おしまる、かな

口くちすさむ歌うたのうちにも子こを思おもふ

○ 深ふかきなさけぞ思おもはれにける

唐國からくにの野山のやまに臥ふせる我身わがみより

○ 母ははの心こころぞおもひやらる、

門かどの邊へに送おくる母君ははきみおろがめば

○ 泣なかじこすれこ涙なみだこぼる、

陣中母を懷ふ古歌

(天平勝寶七歲筑紫に遣さるゝ諸國防人等の歌、萬葉集所載)

○ たらちねの母を忘れてまじこ我

○ 旅の假慮に安く寢むかも(國造丁日下部使主三中)

○ 我が母の袖持ち撫で、我が故に

○ 泣きし心を忘らえぬかも(山邊部上丁物部乎刀良)

○ 津の國の海のなぎさに船装ひ

○ 發し出も時に母が目もかも(鹽屋部上丁大部足人)

○ 天地のいづれの神を祈らばか

○ 愛し母にまた言問はむ(埴生部大伴部麻與佐)

○ 吾が門の五株柳いつもいつも

○ 母が戀ひすす業ましつしも(結城郡矢作部眞長)

○ 眞木柱讀めて造れる殿の如

○ いませ母刀自面變りせず(坂田部の首磨)

然るに、同母堂の遺言には「決して満洲に居る篤次郎には知らせて下さるな、若しも其のため戦地に於て行動の鈍る様な事があれば、陛下に對し奉り申譯がない。」と、誠に軍人の母として、天晴れなる最期にて御座候、願はくば中隊長殿より脇本軍曹へ此の旨御聞かせ被下度、御願ひ申上候。」

聞いた事もない差出人の名に、慰問状だらう位に軽くひきこつて、読み始めた中隊長は驚いた。母堂の遺言に、軍人會の人々の行届いた厚い情に、中隊長は泣かされた。

此の日軍曹は縦列隊長として戦線に立つてゐた。

夜に入つて歸つて來た軍曹を待ち兼ねた中隊長は、早速彼を自分の部屋に呼び入れて、先つきの手紙を読み聞かせた。

黙つて聽いてゐる軍曹の面に、一抹の暗い影が動いた。

「……そんなやうなわけだ、力を落さずしつかりやれ。」

中隊長は、眼をあげて軍曹を見上げた。

軍曹の眼からは、止めぎもなく熱い涙が、次から次へ流れ落ちた。

だが、軍曹は母の死を悲しんだのではなかつた。慈愛の母の最期の言葉に、胸を打たれたのだ。

側にゐた宮本大隊長も、阿部副官も目頭を熱くした。

彼は暫く黙つて突立つてゐたが、やがて面をあげて敬禮するに、ニッコリ笑つて立ち去つた。

軍曹は決心したのだ。彼の——今は世になき母の遺言に違はず、祖國の爲め目覺しい、働をすべく決心したのだ。

星の多い、月の明るい其の夜半、中隊長は、縦列宿舎の前に黒い人影を見た。

彼は此の静かな熱河の夜半、獨り起き出で、何をせんこするか？

中隊長は、じつこその人影を見守つた。黒い人影は遙か東方の空を仰いで手

を合した儘動かない。(お、それは亡き母の冥福を祈る脇本軍曹ではないか、焚く香もなく、手向くる花もない此處熱河の戦場に、彼はせめてもの母への孝養に合掌してゐるのだ。)

「脇本！」

中隊長は思はず走り寄つて聲をかけた。

「明日は、一日休んで母上の御冥福を祈つてやれ。」

軍曹は驚いて顔をあげたが、やがて靜かに頭を振つた。

「中隊長殿、それは駄目です。第一線では、既に糧食盡きて旅團長閣下を始め、皆さんが、二十日間も粟を食ひ鹽を嘗めて居るこのことです。こんな事で休んでは居られません、明朝は凌源に出發します。それが却つて亡き母に對する孝養です、母もきつこ喜んでくれるでせう。」

中隊長は、軍曹の手をしつかり握つて共に泣いた。

その翌朝蜿蜒長蛇の列を作つて、清水特務曹長の率ゆる四箇縦隊は、凌源に向つて進んで行つた。

午前六時頃大平房西側大凌河の氷上を通過しつゝ、あつた脇本軍曹の率ゆる縦隊の一車輛は、突然氷の龜裂から河の中に墜落した。

驚いた支那馬夫も、監視兵も手を下す術を知らなかつた。零下二十度の此の寒冷に河中に入ることは、凍傷を覺悟しなければ出来ない業だ。

唯騒ぐばかりだつた。

飛んで來た脇本軍曹は、馬から飛び下りるが早いか外套を脱ぎ棄て、ザンブミ河中に飛び込んだ。

之を見て力を得た馬夫も、監視兵も續いて躍り込んだ。

車も馬も見ろく内に引き上げられた。

軍曹は、丸濡れの部下達に、細々凍傷豫防に就て注意しながら、

彼は自分の防寒外套を、水に濡れ寒さに慄えてゐる支那馬夫にかけてやつた。そして笑ひながら馬に飛び乗るこゝ、一鞭くれて縦列の先頭の方へ走り去つた。

「母は遺骨を待つてゐます」と

白装束を送る

滋賀縣犬上郡に多賀神社と云ふ社がある。

満洲事變が勃發してから、まだ間のないある夕方のごとき、このお社の拜殿の前に一人のお婆さんが、額づいて何事か一心に祈つて居た。打見たところ、七十を三つ四つ越したかと思はれる様なお婆さんで、素足に藁草履をはいて手には何か風呂敷包みを持つてゐる。

「ごここからお出でなすつたか」

御社の神主さんがたづねるこゝ、お婆さんは嘎れ聲で答へた。

「私は久居町の野沢いさご云ふ者です。息子の佐吉は、一昨年朝鮮の龍山の聯隊に行つてをりますが、こんさいよく出征するこかいふ話。私は何か送つてやりたいもの色々考へたあげく、戦地に行つて十分な働きが出来らやうに、白衣の死装束を送つてやることにしました。只今持つて參つて居りますから、これを神様の前に供へて、俵が十分働きをします様に祈つてやつて頂きたうございませう」

神主さんは之をきいてお婆さんの健氣な覺悟にすつかり感心しました。が、その日はもう遅かつたので、翌朝早く、また来るやうに申しました。

お婆さんはこの村には、誰一人知り合ひの者がないので、その晩ごころ泊らうかこ困つて居るこゝ、丁度、其所へ通り合せた隅田安次郎と云ふ在郷軍人がこの話をきいて、心から感じ入り、早速お婆さんを自分の家に連れて行き、湯を沸して入れ、又御馳走をして親切にもてなした。

その翌日、お婆さんはまだ暗い内にお社にやつて来て、自分が精神こめて仕立上げた白装束を着て神前に坐り、神主さんにお祈りをして貰った。

その後でお婆さんは、丸で目の前に息子がゐるかのように、白装束に向つて懇々と言ひきかすのであつた。

「これ佐吉！わしは、お前に生きて歸つて貰わうとは思はない。さうかこの白装束をきて、御國の爲に立派な働きをして死んでおくれ。わしはお前のお骨の著くのを待つてゐます。」

その場に居合せた神主達は、之をきいて、皆、目に涙を泛べて感じ入つた。

吾が子の身代りに立つた母親

豫備歩兵一等兵山蔦徳一君の應召入隊に當り、母のナツ子さんはその門出を祝して

「御國の爲めだ、家の事なご心配せず、シツカリ働け、未だ両親も元氣だし、子供も澤山あるんだから、天皇陛下の御爲め命を的にウンミ働け」

と、勵まし同君入隊の翌日から、七町餘りの山上、氏神多和神社に、七日間の願をかけ、肌を刺す寒風を物ともせず、素足詣をして、皇軍の武運長久と吾が子の手柄を祈願したが、何しろかよわい老婦の身にて、満願の翌日からドツト病床に臥す身となり、段々重態に陥り一家心をこめての看護の甲斐もなく、吾子の名譽ある働きを祈りつゝ、遂にその身替りになつて果てたのであつた。

突如、愛妻を亡した一等兵の父君も、此の出来事を戦地の一等兵に知らせては、萬萬一にも意氣が鈍つて、人におくれを取つてはならぬと、斷然一等兵の耳に入れぬ事に決して葬儀を営んだ。

かゝる不幸のあらんは夢にだも知らぬ一等兵は、上海方面に於て、日夜軍務にいそしみ、三月二十六日無事凱旋するこゝに、なり、久方ぶりの懐かしい父母兄

弟と語り會ふことを樂みつゝ、高松港に上陸した時、初めて知つた母の死にさすがの一等兵も愕然として、暫しは言葉も出なかつたが、漸く氣をこり直して「自分の無事凱旋も母のおかげだ。」と叫んで、直ちにその墓前に詣で、生ける人にもものいふ如く、涙と共に凱旋を告げたので、居合はす人々貰ひ泣きせぬはなかつた。

戦場の愛兒に父の死を秘むる母

第十師團衛生班の看護兵中島秀夫君は、出征以來、第一線にあつて、勇敢沈著に負傷兵の收容、救護に任じ、病院にあつては親切、熱心に傷病兵の治療に精勵し、看護兵の模範として、幹部にも傷病兵達にも、絶大の信頼を、尊敬を一身に集めてゐた。

かくて看護兵は十年一日の如く其勤務に服したが、愈々満期凱旋の直前、計らずも看護兵の母親から、衛生班長宛送られた左の手紙は、班長始め幹部一同をひびく感激せしめた。

「先日は誠に御親切なる御手紙頂戴致し、厚く御禮申し上げます。扱秀夫出征以來は、數ならぬものこの御さげすみもなく、御愛撫御薫陶下さいまして、有難く存じます。お蔭を以て不肖なる忝も人並に國家に御奉公の出来ましたことは感謝に堪へない次第であります。

次に軍務御繁忙の折柄、私事を申し上げますことは、恐縮で御座居ますが、實は去る十一月十九日午前零時十分、秀夫の父次郎が腦溢血で世を去りましたけれ共、國家の爲め一命を捧げてゐる者に、父の死を知らせ、萬一にも御奉公の心がにぶる様なことがあつては、國家に對し申譯ない次第に存じまして、今日迄本人に知らしてありません。これは一面に於きましては、一度水盃として出征した以上、生きて還るこころなき思ひもかけませんから、名譽の戦死

を遂げる場合に、せめて無事壯健なる父母の姿を幻の裡に見せてやり度い
心遣りからで御座居ます。

「こころが承りますよ、秀夫達は近く凱旋するよか云ふよこ、よし生命はお
國に捧げなくとも、充分にお國への勤が出来ての凱旋ならこんな嬉しいよこ
はありません。」

「お恥かしい次第ですが、さう承はつてからは、秀夫の歸國がしきりに待た
れます。さうか愚かな母もお笑ひ下さいませ。」

「こゝに困りました問題は、父の死で御座居ます。凱旋の芽出度い席で、此の
悲しい報告を聞かれますのは、母として忍びません。實は、それで、班長様に
お願ひ致し度いのは凱旋するよこにきまりました節は、甚だ恐縮ですが、
原隊を離れます時か、内地到着致しました時か、時機を見て、自暴自棄に陥
らぬ様、お戒めの上、父の死をお聞かせ下さいませんでせうか、班長殿より

「お話願へれば、必ず女々しき振舞は致すまいよ存じます故何卒悲しき母の心
情をお察し下さいまして、この儀御聞き届け下さいませます様涙り上げます。」

(後略)

高橋上等兵の母

南天門の夜襲を終つて、戦場は未だ血腥かつた。

死體收容者の群が、二人づ、後方の丘阜の蔭に消えて行つた。

その後には血痕のへばりついた雑草がなびいてゐた。

血を吸つた大地には黒い斑點が其處彼處にちらばつてゐた。

中隊の幹部達は掩蔽部の中で、次の作戦に餘念がない。こゝ、突然其處へ一通
の電報が舞ひ込んだ。

電報は中隊長宛のものであつた。隊長は一寸肩をくもらしたが急いで封を切

つた。

「タカハシセイイチノチ、シンダヨロシクタノム」

目讀した。

溜息をついた。

そして部下高橋上等兵の姿を思ひ浮べるやうに、天井を仰いで眼を閉じた。傍の幹部達が隊長に眼を向けた。

「何事です」

やがて中尉が口を切つた。

中隊長は聲を出して電報を一同に讀み聞かした。

高橋上等兵は溝帮子の戦闘以來通信班に勤務してゐた。

それで此處には居なかつた。

中隊長は早口に命じた。

「傳令を呼べ」

が、隊長は躊躇した。自分の口から上等兵を慰めてやるここの出来ない今本人に知らしてやるこゝをさうかと思つた。

傳令は飛んだ。

中隊長は暫し呆然と立ち盡した。

やがて傳令は息を切らして歸つて來た。

隊長は待ちわびてゐた。

「高橋はびつくりしたらうなア」

息をはずませて聞いた。

傳令の答は以外だつた。

「はい、黙つて見てゐましたが、有難う、中隊長殿に元氣で働いてゐますからと言つてくれと言ひました。」

隊長の憂色は動かなかつた。

隊長は、人間最大の悲劇の前に、努めて平静をよそおふ部下の態度を賞揚する前に、否彼がより平然と振舞へば振舞ふだけ、隊長には上等兵が氣の毒に思へてならなかつた。

それから幾日か過ぎた。

五月十三日の朝、隊長名は高橋上等兵の母から一通の手紙を受けまつた。

手紙の内容はほゞ解せられたが、讀んで行く隊長の手はふるえて來た。頬を傳つて一條の涙が手紙の上に落ちた。

隊長は云つた。

「言葉も無駄だ。筆も要らぬ、おい、これを讀んでくれ」

彼はその手紙を部下達の前に突き出した。

「拜啓、前略」

私は第七中隊通信班高橋清一の母で御座居ます。實は清一父去月十三日工事出張橋懸作業中怪我を致しまして、其の後病床に臥して居りましたが、介抱の甲斐もなく、清一の元氣な御奉公を喜びつゝ、今月十三日、遂に永遠の眠りに就きました。私は田舎者故何も判りませんので、悪いことは思ひながら過日電報で御願ひしたので御座居ます。

若しも家のことを心配して充分の働が出来なかつたら申譯もない事で御座居ます。私は皆様の御蔭で元氣に暮して居ります故、恐れ入りますが清一を慰め勵ましてやつて下さい。戦場にある國家に捧げた子を、まだ我が子と思つて清一の心をかきみだし、皆様に御迷惑をかけたことを心からお詫び致します。かしこ

中 隊 長 殿

高 橋 ス エ ノ

死に直面して我子を勵ます母

滿洲〇〇〇獨立〇〇隊歩兵第一大隊第三中隊の鈴木善次郎君(山形縣南村山郡南沼原村沼木出身)家族一同、就中母キノさんは善次郎君の奮闘を期して、常に音信し、激勵して居たのであるが、昨冬寒さが障つたものか、俄に病褥に伏す身となつた。

けれどもキノさんとしては、自分の病氣の事等は殆ど眼中にないかの如く、常に我が子善次郎の事をのみ氣遣ひ、戦地の事になるに胸を躍らせて聞いて居た。

兎角する中に、母親キノさんの容態は益々重くなつた。近親の人々は萬一の事を慮り戦地にある善次郎君へ、母病氣の事を知らすべく相談した。

傍に寝て居たキノさんは、これを聞くこ

「皆様、死んで行く私の最後の願ひです。さうぞ聞いて下さい。善次郎は私の子で御座いますが、今は私の子でも何でもありません。身體も命も既に天皇陛下に捧げてあります。あの子の父も叔父も戦争に出た勇士です、父や叔父に劣らぬ手柄をたてさせたいのが、この母の一生の願ひです。たゞへぎの様な事があつても、此の滿洲事變の終るまで知らせて下さらぬ様お願いします。さうぞ……………」

キノさんは斯う言ひました。

其後同じ村の佐藤泰重君は、同じく〇〇〇守備兵として渡滿入隊した。そして彼は、鈴木善次郎君に、家郷の委細を知らせた。

母の病氣を初めて知つた善次郎君は、驚いて直ちにペンをこり

「…………戦地にある此の身、何時敵弾にたふる、こも決して惜しくは無之候へども、母上の病氣を考へる時は、未練ながら飛んで行つて、母上に見えん心にて

一ぱいに御座候し然し卑怯未練は日本軍人にして、斷じて許さぬごころ、善次郎は益々精勵仕るべく候條、母上にも治療專一になされ、一日も早く全快の程、遠く湖北の戦地より神かけて祈上候し(下略)
然し母の病氣は遂に快方に向はなかつた。日一日と瘦せ衰へて今は命も旦夕に迫つた。

けれど——危篤の母の心には、たゞ我子の武運長久と戦捷を祈るの外、何も、ものなかつたのである。

一月三十日午前二時、キノさんは遂に臨終の身となつた。末期の水を飲まされた。次第に呼吸も薄れて行く——終焉——微かながらも「てんの——陛下——ばんざい——い」、キノさんは斯うして逝つた。

善次郎君の戦功を祈りつ、……最も勇敢なるものは最も柔和に、最も愛情のあるものは最も剛毅なり、ささへ詩人は唄つたではないか。

在隊間の零細な貯金を青年訓練所に 寄附した現役兵とその母

獨立山砲兵第一聯隊第一中隊砲兵上等兵高橋日吉君は、入隊以來よく上官の命を守つて軍務に勉勵し、品行方正他の模範として、上下の信頼を一身に集めてゐたが、一日、中隊長を訪ね、自己の貯金の中から、金二十圓を郷里の青年訓練所に寄贈したき旨、申出で一入中隊長を感激させた。

聞く所に依れば、彼は自分の家業の關係上、青年訓練所の教育を充分に受けることが出来なかつた事を遺憾に思ひ、豫々何かして訓練所の爲め盡したいと心懸けて来たか、偶々彼が通信手である關係上、郷里の訓練所に手旗を寄贈せんことを思ひ立ち、在隊間の零細な作給を積立て、ゐた貯金の辨戻しを、中

隊長に願出た云ふことである。

其の事情を聞いた中隊長も大いに彼の志に感激し、除隊時の軍服調製費用を控除した残額金二十圓を拂下げることを許可したので、狂喜した彼は、早速之の郷里の訓練所に送附した云ふのである。

郷里の村長始め訓練所主事は、現役兵から金錢の寄附を受けるに忍びないこと、其處置に關し、之を本人の家庭に相談したところ、高橋君の家では、家族一同「本人の心情を察して受領せられたい」と切に懇願するのみならず、母親は當人の入隊後の小使にも、密かに若干の金を準備して置いたのであるが、まだ一回も請求して來ない爲め、その金も今は不要だ、金三十圓を更に寄附したいと申出た。

村長や訓練所主事は、重ね々この奇篤の志に再三固辭したが、母親の懇切なるため、遂にその真心に感じ、母子の分合計金五十圓を訓練所の基金

として受領することにした。

危篤の母を残して演習に應召

岐阜縣武儀郡南武藝村高野四八番地、後備役陸軍歩兵一等兵山本清一君は去る六月二十七日勤務演習の爲め、歩兵第六十八聯隊に集召された。

當時病床に臥す母の身を按じながらも、應召以來熱心に軍務に勉勵し、日ならずして、他の模範兵として中隊の信頼を一身に集めた。

七月八日、師團衛生隊の演習に参加する爲め、山本君は战友と共に、名古屋市外東地廠舎に到着したが、日夜彼の腦裡を去らなかつた母の危篤の電報に接した。母思ひの山本君の驚きは一通りではなかつた。

早速隊長の許を得て取るものも取敢へず歸郷したが、山本君は、そこに以外な母の言葉を聞いた。

『お前は何故歸つて來た。お上に御奉公中の身で、母の看病は何です、一刻も早く歸隊して御奉公しなさい。』

山本一等兵の姿を見るに、母はこみあげるうれし涙をおしかくしながら、今日明日の命も思はれぬ、凛々しい聲で我が子を激勵した。

山本一等兵は、事の以外に、しばし呆然と立ち盡したが、やがて、我にかえつた彼は、母のこの健氣な言葉に感激し、母の病床に残る心を押し切つて、決然として歸隊した。

歸隊の途中、彼は所屬第十一中隊長高崎大尉の許に立寄り母親のこみを委細報告した。中隊長は『今夜は遅いから明朝出發したらさうか』と諭したが、山本君は『明朝は演習がありますから、本夜中に歸廠せねばなりません。』と中隊長の慈愛の勸告を退け、夜行で廠舎に歸り其の日の演習に活動した。

七月十日、母は遂に死亡したが、此の短い召集期間に歸郷するのは、曩日の

母の意志に背くからミ休暇を願はず、限りない悲しみを胸に抱きつ、平日の如く演習に精勵した。

母の死に歸らぬ出勤間際の兵士

朝鮮咸興歩兵第〇〇聯隊第七中隊の石瀨一等兵は、突然の母の計報に全く暗然とした。

重い病床の母に、覺悟はしてゐたもの、流石に彼は悲しかつた。

情深い班長や、特務曹長は最後の孝養だミ頻りに彼に歸郷を勧めたが、彼は頑として歸らなかつた。

若し歸省した留守に、熱河出勤の命が下つたら、至急、歸隊したにせよ、彼は當然留守隊に残されるであらう。それを彼は恐れたのだ。

歸らないミすれば、早速そのこみを氣の毒な父に知らしてやらねばならぬ、

石瀬は涙を呑んで次のやうな悲痛な手紙を書いた。

「突然の訃音に驚き入りました。母の死、何云ふ悲しい出来事でせう。一時は夢かよばかり思はれましたが、夢には非ず、此の現實の悲しみに思はず不覺の涙を落しました。

私は歸郷したかったです、一度歸つて母の死顔になりとも最後の別れをしたかったです。特務曹長殿も、班長殿も、一度歸つて来ては云はれます。然し、私は堅い決心のもこに歸りません。答へました。近く出動命令の下ることを信じてゐる私は、母に會ひに歸つたが故に、再び残留致す様な事にでもなりましたら、軍人としての價值が何處にありませうか、或る人は云ふでせう「親不孝者よ」こ、私は答へます「親不孝者になりたくなければこそ歸郷しないのだ」こ、お父様にだけは、今の私の心持が良く解つて戴ける事と思ひます、只残念に

思ひますのは、母の生前何一つ孝養の出来なかつた事です、私は死を賭して軍務に勉勵し、何時か故郷に錦を飾る事が出来得れば、軍人としては以上の親孝行はないに信じます。私は日本人に生れたことを喜びます。それは、忠孝一致であることです。同封の金二十圓は少しではありませんが、私が軍隊生活中少しづつ貯へた軍隊の尊い金であります。何卒、お母様の靈前にお供へ下さい。では後の御供養懇に御願ひ致します」

この手紙を受け取つた父が、吾が子の健氣な覺悟に感涙にむせぶ頃、石瀬は彼の望み通り熱河討伐の途に登つてゐた。

母の激勵に戦場の花と散る

「お前は軍人でありながら、何故外の人達と一緒に戦地へ行けないのか？」
花田上等兵の母親は、彼が出征しなかつたことを、日頃の彼の成績が悪いが

らだと思つて、ひきく彼の意氣地なさを吐つて來た。

花田にして見れば、聯隊の第一次渡滿の噂の始まつた頃から、中隊長には機會ある毎に、出征出来るやう嘆願して置いたのだが、貧しい家の頭に生れた花田の身を心配して、中隊長はこうしても、彼の願ひを聞いてはくれなかつた。花田は母の手きびしい此吐責の手紙を見た今、もうじつ我慢が出来なかつた。

母親の手紙を突きつけて、泣きついて出征をせがむ彼の面を見し中隊長も、遂に彼の願ひを振り切る勇氣は出なかつた。聯隊第二次渡滿の際には、喜んで一緒に出征さしてくれた。

彼は入營以來、戦地に來てからも、陣中僅かな給料の大部分を、國許の老母に送つて、たえず孝養を忘れなかつた。

山海關攻撃の三、四日前、花田は弟妹の名で

「お母さんは私達が大切に孝行して居ますから、國許のここは心配せず、御國の爲めに働いて下さい」

と云ふ手紙を受け取つた。

彼は考へてほろり、ささせられた、年齢のゆかぬ弟妹にこうして家を支える力があるものか、それに——それに何と云ふ悲しい嘘を言つてよこすのだらう。

彼は暗然と涙にくれた。

X

X

昭和八年一月三日、山海關の攻撃に、花田上等兵は輕機關銃分隊長として、突撃隊の第一線にあつた。

その朝中隊は敵前約百五十米の處で、突撃の時機を待つてゐた。中隊長は高粱を焚いて其の圍りに部下を集め、心筋かに部下に袂別の撈撈をした。

「皆んな、腹が空いたら、何んでも遠慮なく云へ、喰ひたいものは何でも食は

してやるから買つて来い」
静かにそう附け加へた。

日頃快活な室川一等兵が飛び出して行つた。にこ／＼しながら歸つて来たの
を見るに、手に「チャンチウ」ミ豚饅頭をぶらさげてゐる。

「多謝、多謝」

皆んなは、おぼつかない支那語で、口々に彼に禮を云ふに、笑ひながら豚饅
頭を頬張つた。

「今日は誰が一番先に内地に歸るだらうなア、今日なら大抵歸れそうだ」

おどけたやうな、而し、しんみりした調子で花田上等兵が云つた。突飛な彼
の言葉に、皆んなは顔を見合せた。

花田は此の時から既に戦死を覺悟してゐたものらしい。

城内掃蕩後、花田分隊は北關に突入し、ついで北門の西北角に陣地侵入して

蜘蛛の子を散らしたやうに退却する敵を射撃してゐたが、その日の花田は何時
もの濃厚な態度にも似ず、阿修羅のやうに猛り狂つて、全く別人のやうに思は
れた。小隊長の杉野少尉は、鐵兜を被つてゐない花田の姿を見つけるに、そつ
と後から、彼に鐵兜を被せてやつた。

此の時迄は、敵の彈丸はそう激しくなかつたが、山海關東北角以北の長城一
帯に陣地を占領した敵に、我が中隊の北門進入が發見されるに、中隊は東西兩
方から猛烈な十字火を受けた。

花田上等兵は又鐵兜も被らず、夢中に射撃を續けてゐる。するに彼の右に居
た米塚一等兵がやられた。彈藥手の福士一等兵は分隊長花田上等兵の身を氣づ
かつて彼の後から、そつと鐵兜を頭にのつけてやつた。

その瞬間――

「やられた！」

こ、叫んで花田は左手で右の胸を壓へた。強く身體をねじるこ、東方に向き直つて口と鼻とから、はげしく血をはいた。両手を上げて、

「天皇陛下萬歳」

こ大聲に稱へながら

「分隊の後はしつかり頼むぞ」

こ叫んだ。

その儘、仰向けに倒れた。福士一等兵が水筒の水を口にふくましてやつたが、彼はさうく眼を開かなかつた。

「母は覺悟してゐます、人におくれを

取るな」

寛甸縣大平哨の激戦で名譽の戦死を遂げた、わが上等兵古井田七太男君の遺

留品の中から、一通の手紙が発見されたが、その文面には吾が子のため花々しい奮闘を祈る母親の眞情があふれて、見る者をして感泣させた。

「拜啓、その後も變りなく無事軍務に御勉勵の由何より目出度し、私始の子供も皆無事に暮して居ります。お前達が出動以來毎日の如く新聞では見しめるが詳しいところは判らず、戦死者の姓名は書いてありましたが、お前の名はまだ出て居らず、母は毎日、神佛様に日本軍人の武運長久をお祈りしてゐます、けふまでまだ無事軍務に従事してゐるこの事、今後共、なほ一層軍人として重大なる任務を全うし決して人におくれを取らな。

人は死しても名を残す、母は覺悟してをります、軍人として現役中に困難に當るのは何より幸福、命のある限り、力の續く限り大いに奮闘して天晴れ軍人の本分を汚さず、父の子として恥かしきこなく最後迄、大元氣で奮闘あらんことを呉々もお願い申します。軍人として戦線に立つのは何より、名譽この上

なく母は肩身が広い、満洲上海事變のときは、まだ初年兵でしたので戦線に行かれぬのが、母は肩身が狭かつた。大いにやれ、

運命は天に任せよ！

倒れても涙を流すな！

この意氣此の覺悟でしつかりやれ、母はたのむ(中略)留守宅のことは少しも心配せず、只々國家の御奉公を第一に益々大奮闘あらんことを祈りあげます。

母より

七 太男様

父の死を秘す涙ぐましい母親の心事

朝鮮羅南歩兵第七十六聯隊第七中隊一等兵鈴木春雄君の嚴父桂次氏は業億驛

長の職に在つたが、春雄君の滿洲出動に當り見送りの爲め停車驛城津に出かけて行つたが、不幸軍用列車に觸れて未だ俸に面會せぬうちに無殘の死を遂げた。この慘事を夢にも知らぬ春雄君を載せた列車は翌日城津驛に到着したので豫て通知を受けてゐるころ、て、父母に名残りを惜まんものさ、しきりに捜し求めたが、遂に見當らなかつた。それも道理、當時母親は慘死せる夫の亡き骸に附添ふて、あま始末に心を痛めてゐたのであつたが、健氣にも決心した母親は、出動途中に在る我が子に、父の死を知らせて萬一御奉公に失態があつてはと思ひ、自分も面會するころを避け、荒田城津驛長を通じて、
「父は急に公務の差間で見送りが出来ない。従つて、母も送らないが、唯一途に軍人の本分を盡せよ。」

この傳言を依頼した。

春雄君は兩親に會へぬのを残念に思ひながらも、元氣旺盛で征途にのぼつた。

不慮の奇禍で、夫を失ひ唯一人の長男を征途にのぼらしめた孤獨の母親は、その後、夫の遺骨を携へて郷里豊橋市に歸り、ひたすら亡夫の菩提を弔ひ、且つは我が子の武運長久を祈つてゐた。

一方父の變死を知らぬ春雄君は、何故兩親は急に内地へ歸つたか、又人一倍子煩悩の父からごうして便りが無いか、不審がつて尋ねて來ても氣丈夫な母親は「兩親の事は心配せず君國の爲めに忠勤を勵むやうに」
ミ激勵の手紙を送つてゐた。
つはものを子に持つた母親の此の健氣な行動は、涙なしには到底聞かれぬ話である。

母の乳房に甦る傷兵

日露戦争の時であつた。多くの戦傷兵が、滿洲に於ける輝やかしき武勳を、

不自由な身體に負ふて、續々後送されて來た。

静岡縣下の或る小さな村から出征してゐた田澤武次君も顔面に名譽の重傷を受けて、廣島衛戍病院に收容されることになつた。

その報知を受けた田澤君の母親は、久し振りに我が子に會へる嬉しさに、取るものも取り敢へず、百何十里を汽車に揺られて廣島まで面會にやつて來た。軍醫に導かれて病室に入るに其處に、十程列べられた寢臺に、白衣の傷病兵達が靜かに横つてゐた。

母親は忙し氣に病兵を見まはしながら、

『あの、武次はこれでございませうか？』

と訊ねた。軍醫は同情深い顔をして、黙つて眼顔で一人の病兵を指した。

『あ、ツ。』

指された方を一目見た母親は、思はず驚きの叫びを擧げないわけにはいかな



かつた。そこには顔一面を繻帯で巻かれた男が横つてゐる。それが武次君であつた。

母親はそれを見て、茫然として立ちすくんだ。その痛ましい姿が、ぎんなに母親の心を締めつけたことであらう。

けれども、ごもかくも我が子の生きて歸つた姿を見て、母親は心から喜んだ。そして寢臺に近づくなり、武次君に抱きついて言つた。

「武次や、よく歸つて来ておくれたね、私だよ、お母さんだよ、傷は痛くないかい？」

するこそその病兵は、自分に抱きついた母親を何と思つてか両手で強く押し返した。

母親はびつくりするに同時に、急に顔が土色に變つた。

「軍醫さま、一體これはどうしたことでございませう。」

母親に訊ねられた若い軍醫は、眼に一ぱい涙を溜めた顔を擧げて言つた。

「お氣の毒ですが田澤君は、敵の砲彈の炸裂によつて、眼も耳も傷つけられたので、何を言つても聞えないのです。」

さういふ間かされた母親は、しばらく思案に暮れてゐた。が、突然立ち上つて急いで自分の胸を掻きあげた。そして皺だらけの乳房を引っぱり出して、それを武次君の口に押しつけた。

武次君は又びつくりした。が二三度首を傾けたかと思ふにそれが女の乳房だ。判つたのか、びつくりするやうな大きな聲で、

「あッ、お母さんか！ お母さん！」

「お、わかつたか！ お母さんだよ、武次！」

母親もさう叫んで、しつか武次君に抱きついた。

二人は高い／＼喜びの感情に打たれながら、いつまでもいつまでも抱き合つてゐた。

條理を盡した息子の手紙と健氣な母親

『女千人の手で一針づ、縫ひ合した腹帯をしめて居れば、戰場に出ても鐵砲の彈丸があたらない』

昔からそんな風に言ひ傳へてゐる。殊に老人達はそれを信じてゐるらしい。滋賀縣蒲生郡神崎地方には、小學校補習科の女生徒や、高等女學校の生徒達の手を煩はして、此の千人縫ひの腹帯を作つてゐる母親達があつた。

蒲生郡桐原村大字池田の青山きぬさんも、その母親の一人である。

去年の冬、朝鮮龍山の歩兵第七十九聯隊に入營して、事變と共に滿洲に出動した、きぬさんの三男、正二君(二三)に、千人縫の彈丸よけ腹帯を送りたいの

であつた。

子を思ふ親の心は誰しも皆變りはない。

きぬさんは、この程來、同村小學校補習科の先生や、八幡高等女學校の生徒達、さては、街路に行き交ふ婦人達に願つて、一針又一針と、腹帯の千人縫を急いでゐたが、或る日のこゝ、何を思つたのか、突然腹帯を作るこゝを止めてしまつた。

村人達が不思議に思つたのは勿論である。がこれには深い事情があつた。母親からの手紙で、腹帯のこゝを知つた正二君から左のやうな返事があつた。

『あふれる母の愛情は、涙を流して有難くお受け致しますが、畏れ多いことながら、私既に一命を 天皇陛下に捧げた身體です。此處滿洲で、鐵砲の彈丸にあたつて死ぬのは皇國の爲めではありませんか、名譽い戰死ではあり

ませんか。

お母さん、私は生きて歸らうなご、は少しも考へては居ません。ごうか、そんな古い迷信なき捨てられて、腹帯の千人縫ひは思ひ止まつて下さい。」

此の正二君の決心が、母親の心を動かしたのである。始めてその事情を知つた村人達は、正二君の見上げた志、母親の覺悟に非常に感動した。そして、今迄血眼になつて千人縫ひを作つてゐた人々も、迷信からさめて、千人縫腹帯を送ることを思ひ止まつた母親達も少くないと云ふことである。

自分の寫眞を送らぬ母

「手紙は見ました。お前が補充隊に残されたことは色々事情はあるやうですが、皆さんが第一線に立つて戦をなさるのに、お前は何故それをだまつてゐる

ますか、妾は、お前がそんな意氣地なしとは思ひませんでした。ごうか中隊長様にお願ひして、一日も早く敵の居る處へ行つて働いてくれ、立派に國のため盡してくれ。……」

歩兵第十五聯隊第二中隊歩兵一等兵中村斌男君は、その手紙を受け取るに、居た、まらず、すぐその足で、手紙を持つた儘、隊長の部屋を訪ねた。

「中隊長殿、御願ひがあります。中隊長殿聞いてやつて下さい。第一線に行かして下さい。これは私の願ひばかりではありません、母の氣持をお察し下さい」

彼は、興奮し切つてゐた。手紙を見た中隊長も、流石に瞳を曇らした。

一等兵は慄えながら泣いてゐる。中隊長も部下の此の熱情に動かされて、しきりに頭をひねつてゐたが、漸く一策を案出した。

それから間もなく一等兵は、野戦隊に轉出して第一線に立つことになった。孝心深い一等兵は、母に此の由を告げ、せめて此の世の思ひ出に母の寫眞を送つて戴きたいと言つてやつた。

折返し、母親からは返事が來たが、そこには母親の寫眞は入つてはゐなかつた。

「……………若しお前が戦死して、敵に發見された時、お前が妾の寫眞を持つてゐたら、事情を知らぬ敵兵は、きつこ、日本兵は女の寫眞を持つてゐる言つて笑ふでせう、死んで敵兵に笑はれることは日本男兒の恥です……………」
そんな意味の手紙と共に、昨年死んだ父の寫眞が入れてあつた。

此の母にして此の子あり

金母宅の總攻撃に、壯烈な戦死を遂げた歩兵第二十二聯隊第十中隊上等兵

島内定次郎君の出征間際の話である。

動員令が下つて、愈々出征の日も間近に迫つたが、島内上等兵は歸省する様子も見せなかつた。

「年末休暇の時、父や兄にはお別れして來たから今更改めて歸省するにも及ばない。」

そう言つて、家には何んとも通知してやらなかつた。それでも、動員令が下つた今日、故郷の人達がそれを知らぬ筈はない。

島内上等兵の兄は、無理に母親を勧めて、弟に會ふため、一日、聯隊の營門をくぐつた。

以外な母親達の訪問に、島内上等兵も一寸驚いたが、笑ひながら母親に話しかけた。

「これは、私が在營中に貯金した金です。出征する私に金は要りませんからお母さんのお小使ひにあげませう」
母親も嬉しそうに聞いてゐたが、

「お前が僅かな給料の中から貯めた金を小使にするのは勿體ない。」

そう云つて受け取らなかつた。そして却つて、これは餞別だから云つて、兄弟達から贈つた十圓を、上等兵に握らせた。

上等兵は押し戻した。

「お母さん、私はこれから戦争に行くのですよ、戦争に金はいりません。是非此の貯金も一緒に持つて歸つて下さい。そのかはり折角のお志ですから、御餞別の金は半分だけ戴いて、それで出征記念に、お母さん、兄さんと一緒に寫眞を撮りませう。」
するご母親は、不氣嫌らしく眉をよせて、言つた。

「撮るのはいい、が寫眞を戦地へ持つて行つて、お母さんの姿を見て、もし、お前が卑怯な心でも起すことがあつてはなりません、ですから若し萬一にもお前が無事に凱旋する日があつたら、其の時こそ良い記念だから撮りませう。」

凛々しい母の言葉に上等兵も感激し、自分の決心の程を示して語を繼いだ。

「……昨日も、中隊長殿から肉弾三勇士の話聞いて、覺悟はちやんご決めてゐます、私が戦死したこをお聞きになつたら、三勇士に負けぬ働をしたものご喜んで下さい。」

その言葉に母も満足そうになつた。

「お前の覺悟はよく承知しました。だが、死ぬ許りが決して忠義ではありませんよ、

死に甲斐のある働きをして、三勇士の方々に劣らぬ手柄をたて、くれるやう

に願ひます。」
子を思ふ親、親を思ふ子、覺悟は既に出て来たが、話は何時迄も盡きなかつた。

親を氣にするな、運を天に任せて戦へ

名古屋市南區中町一二〇番地青木仙松氏の息、山田雅夫君(二五)は、中央大學に在學中であつたが、滿洲事變が勃發するともうじつこして居れず、滿洲の第一線に立つて奮戦したいと云ふ火のやうな願ひから、幹部候補生の資格も捨て、滿洲獨立守備隊へ入隊した。

母親のせきさんは、近隣の人達から雅夫君の安否を聞かれると、嬉しそつに語つた。

「雅夫は戦地を變る毎に、何時も、きつこ手紙をくれます。二三日前も、内

地の小學校から生徒さん達の慰問品を買つたと書いて來ました。

私は子供さん達迄が、こんなに同情して下さるのを、心から感謝してゐます。

先日、ラヂオで〇〇部隊がチ、ハルに進撃中と聞いて、大死して呉れねばよいがこ、夜も寝ず、熱田様に祈願をこめました。

雅夫が戦地で働いてるてくれると思へば、育てた甲斐があると思ひますが若しものこごがあつてはこ、今日も、親を心配するな、運は天に任して、男らしく戦つて呉れこ手紙で書いてやりました。」

女労働者となつて子を勵ます母

動亂の天津にある息子の義勇奉公を念じながら、風寒き敦賀埠頭に、女労働者となつて、雄々しくも生活戦線に立つ、健氣な女があつた。

福井縣賀町天満一八三番地、岩田藏太郎氏の長男春太郎君(二二二)は、本年一月敦賀の歩兵第十九聯隊に入隊したが、その後抜擢されて、支那に渡り、天津の守備に任じてゐる。父親の藏太郎氏(四七)は、春太郎君が天津に派遣されるご間もなく、病氣のため此の世を去つた爲め、同家の妻である(四五)さんは、その日から敦賀埠頭の女労働者の群にまじつて、働かねばならなかつた。だが、苦しい生活の中にも、てるさんは不平一つ言はず、夫の遺言を固く守つて、夫の死を春太郎君には知さなかつた。

てるさんは、同じ仲間の人達から、彼女の身の上を尋ねられると、淋しく笑ひながら次のやうに語つた。

「春太郎は、時々私に手紙を送つてくれますが、まだ父の死んだのも知らず「歸る時にはお父さんにも、お母さんにも澤山土産を持って來ます」言つてゐます。

春太郎の外にあれの妹が一人ありましたが今は他家に嫁てゐますので夫に死なれてからは親一人、子一人です。ですから、事情を知つた町の青年團の人達や、近隣の人々から、何時も顔を合わせる毎に、面倒を見てあげるから働かさないで下さいと言はれますが、そんなことをされては春太郎に合はず顔がありません。私のからだのたつしやな中は働きます

それにつけても、春太郎が、二口目にはお父さん、お父さんと言つて手紙を寄越しますので、知らしては、あれが力を落してはいけないと、じつと我慢してゐるのが、私には、此の荒仕事より何より、一番胸にこたえます。」

男まさりの「海軍のおばさん」

事變の上海に、軍人間には「海軍のをばさん」ミ呼ばれ、在留日本人間には「男まさりの女」ミして知られてゐる日本女性がある。

事變突發以來日支軍は幾多の砲火が交へられ、そして幾多の死傷者を出し、野戦病院は名譽の負傷兵を以て満たされた。手足な傷病院へ、毎日の戦闘で傷いた兵士達が續々運ばれて来る。病院は上を下への大忙し。右へ左へ駈け廻る看護兵と一緒に寝食を忘れて、傷病兵の看護に當り、ベッドの間を縫つて歩いて、枕を並べてねてゐる兵隊さんに「痛みはありませんか、何か欲しいものがあつたら、遠慮なく仰有つて下さい」

「小母さん、すみませんが、水を一杯下さい」

「小母さん、恐縮ですが、足がつれて仕方がないです、少しさすつて下さい」
なごみ枕から首を上げて、小母さんが廻つて歩く、いろいろな注文が出る。それを小母さんは機嫌よく

「はい、ちよつとお待たなさい、——はい、水は誰？——あなた、薬をの

まなくてはいけませんよ」

「小母さん、俺は残念だッ、これしきの傷で病院に入れられて残念だ、もう一度、戦線に出られるやうに、小母さんから頼んで下さい」

「あなた、そんなに興奮しちやだめよ、そんなに暴れると傷に障ります、勇しいあなたの心掛は私が隊長に傳へますから早く安静にしてお癒しなさいね、いい兵隊さんね」

なだめたり、おかししたり、勞つたり——あらゆる看護をする。

病院の花だ。

果然、上海の戦線で「海軍の小母さん」の噂がひろまつた。

「俺は海軍の小母さんの手厚い看護で再び戦線に出られるやうになつたよ」

「さうか、君もか、僕もだ、まつたくあの小母さんこそ来たなら親切だから——
賣名や慾得ちやあの看護、あの働きは出来ないよ、あ、いふ小母さんが我々の

背後にあつて聲援してくれるのだ、おい、しつかりやらうぜ……」

「勿論、賛成だ」

病院内で負傷兵が三人五人を群をなして話して居る。きつて斯ういふ會話がきかれるのである。

小母さんは病院で手がすくも、戦線へ進出して、倒れた兵隊を擔いで行く兵の手傳もする、勇ましくも全身に敵弾の洗禮を受けて死んだ兵の骸に跪いて、静かに黙禱を捧げる。一日こして、一時こしても、ちつこしてゐない。事變以來連日の奮闘だ。

小母さんの雄々しい男まさりの働きが、植松指揮官の耳に入り、眼にこまつて感状が授與された。續いて大角海相からも感状が下された。

戦線で目ざましい働きをした「海軍のをばさん」は、勇敢な吾が軍の働きのよつて上海の治安かや、落ちつくこ、此度は内地に送還された傷病兵を、親し

く御見舞しやうこ、四月初旬内地に来て、横須賀海軍病院、大分縣龜川海軍病院、佐世保海軍病院などを歴訪して、顔馴染の兵隊さ達を訪れ

「さう、元氣になりましたか」見舞つて歩いた。傷病兵は丸で子供の様になつて「やあ、小母さんが来て呉れたツ」喜んだのである。

この「海軍のをばさん」は何人であらうか？彼女が上海愛生社の猿丸しげのさんその人である。彼女は海軍省を訪れ、再び上海に歸つて今はまた水兵さん達の面倒を見てくれてゐる。

内地を訪れた時、この敬愛すべき「海軍の小母さん」は謙遜な態度でいふのだつた。

「小母さん、小母さん………こ親しまれる私には、もう無性に嬉しくてなりません。上海にゐる女性の一人として、國家への御奉公で出征された兵隊さん達に、ほんの心持だけのこころをして差上げたのにすぎません。勇敢な兵隊さんの

働きに比較しますれば、私のしたこころなき、お恥かしい次第で、過分なお褒めの言葉なき戴くさかへつて恐縮します」

小母さんの心は愛國の熱情に燃えてゐる、

萬人力お守の「兵隊婆さん」

「萬人力の兵隊婆さん」をしてその篤行を知れた、北海道斜里郡斜里市街の佐野サイ(七十八)婆さんは、去る六月十九日第七師團司令部を訪れ、「何時も御世話になります、これを滿洲の兵隊さんに送つて下さい」云、御神體百九十(價格十九圓)を寄贈し「身は貧相に生れ共、君に忠義の道は忘れず」の一首をものして辭去した。

此のお婆さんは一見七十八歳の高齢にも思はれぬ元氣な婆さんで、日支事變勃發するや、一昨年十一月頃から北海道各地を巡禮し自作の御詠歌と和讃を唱へながら一錢二錢を集まつた零細な金を十錢玉に換へ「ハトロン」紙の封筒に入れて萬人力の御守を作り、再三之を派遣將兵に送つてゐる。

日清、日露戰役當時にも、家が貧しかつた爲め、夜なべに薬細工を作り零細な金を貯金して軍資金に獻金し、その他關東大震災、十勝岳爆發に際しても罹災者義捐金を送りそれ／＼當局から感謝状を受けてゐる。

此度の巡歴中、北見興部の中村忠雄少年(七歳)は滿洲の兵隊さんに送るこ日々二錢宛貫ふ小遣を貯金してゐたが此、婆さんが來た云ふので早速これ迄貯金した金二圓四十錢を出し、是非お婆さんの手から「お守り」にして送つてくれと依頼した。又旭川驛前の旅館の女中佐々木キカ子さんは、日頃此のお婆さんの至誠奉公の志に深く感動し金五圓を送つた云ふことである、お婆さん此の兩人の特志には特に感激し「お守り」に兩人の名を書き入れ、師團司令部へは御神體七十四(價格七圓四十錢)を別に本人名義として寄贈した。

全身熱と血!! 「兵隊の小母さん」

繁華な大阪の、北の新地の花街近く三味も太鼓も早や音絶えて、静まり返つた真夜中に小母さんは今夜も亦唯一人居室に端坐してしきりに重いペンを動かしてゐる。

慰問袋を通じて知り合になつた満洲の兵隊さんに心からなる慰問と感謝の手紙を書き度いと思ふのだが、小學校にも學ばなかつた悲しさに筆の運びもまゝにならない。それでも、さうにかして人手を借らず自分で魂の籠つた手紙を書きたいばかりに此の數箇月間一心に習ひ覺えて漸く此の頃では、平假名だけはさうやら書き綴れるやうになつた。そして此の手紙も一昨日から三日趣して今漸く十七枚の便箋がまごまりかけてゐる。

○

満洲にいへば地圖も見たこころがなく、西も東も皆目見當はつかないが、然し無智の頭にも廣々とした氷雪の荒野原に日本の兵隊達が艱難辛苦して働いてゐる有様が、あり／＼と思ひ浮べられて来る。

——思ひ廻らせば自分が幼い頃日露戦争が起り、長兄は淡路の要塞砲兵から旅順の方へ出征し、留守宅では病床の次兄と産褥にある母を抱いて幼い乍らあらゆる辛酸を嘗めつくして遂に小學校にすら通ふこころが出来ない状態であつたが、それ以來いふものは兵隊のこころを聞いても見ても他事とは思へない自分であつた。

ちつこころ考へてゐるこころ、總ての兵隊が皆、自分の兄であるかの如く、やがては又自分の子供であるかの如くに感ぜられて来る。

小母さんは今書き終へた手紙を封してから暫く之を額におしあて、るたが、其中いつか口の中にかすかに「南無妙法蓮華經」を唱へ心からなる祈りを捧げ

るのであつた。

そしてだんぐさえて来る頭の中、稚い想像を廻らし乍らも、やがては滿洲に活躍してゐる一頭の馬、一門の大砲に對してまで一々「南無妙法蓮華經」を唱へて靜かに合掌するのであつた。

○

昨年の冬頃一時號外々々で世間が熱狂してゐた頃、小母さんは狂氣の如く其號外を買ひ集めては一々叮嚀に其寫眞を臺紙に貼りつけたり、著しいものは額にまでして居室に飾つて置いた。

近所の人が

「お女將さん、それ新聞やおまへんか——あほらし、そんなもの飾りやはつて」
さあきれて話しかけるこ

「あんだ、いくら新聞だかつてこの兵隊さんの寫眞が粗末に出來まつか、私や

この新聞の紙を飾つてくつきのやおまへん、これに寫つてゐる大事な兵隊さんを祭ツ
ごんやおまへんか、

世間の人はもつたいたい、天子様のお姿が寫つてゐる様、兵隊さんが寫つて
るやうに新聞だかこいふご平氣で讀み棄て、しまやはりますが、そりや心懸け
が間違つごりまつせ、私や滿洲の兵隊さんのこころを思ふごもう有難くてこうし
て飾つごかな居られけへん」

ご強くたしなめて、今でも號外寫眞が大切に額縁に入れて飾られてある。

○

出征部隊が歡呼の聲に送られて大阪驛を通過する時、小母さんの姿が驛頭に
現はれないごこは一度もなかつた。

旗を振つて人前も恥ぢずあらん限りの大聲を上げては、いつも「萬歳」々々
を連呼するので聲はしまいに嘎れて了つた。

「しつかりやつまくなはれ」小母さんの手で肩をたかれ、手を握られ、激
勵感謝の言葉をかけられた兵隊は何百人あるか判らない。——彼等はきつこ
大阪驛頭の小母さんの顔を見覚えてゐるに違ひない。

○
去年の春岡山からの歸りに、圖らずも満洲から後送される傷病兵と同車し
たが其時小母さんは目のあたり白衣を纏ふた戦士の姿に接し、「あ、之は神様の
お引合せだ」と思つて、

「ようやつておくなはつた」といつたきり、あまは聲も出でず涙にむせんでし
まつた。そしてこれ等の傷病兵の他に満洲や上海で再び歸らぬ人となつたき
れだけの兵隊さんがあるここかと思つて、最早やいても立つても居られなくな
り、遂に三月十八日自宅で盛大な慰靈祭を行ふことになつた。

爆彈三勇士をはじめ、古賀聯隊長、林聯隊長、其他幾多の戦死者の寫眞や

名簿を備へ、大阪全市から百二十餘名の僧侶を招いて所謂百僧供養を行つた、
個人でこの様に大きな慰靈祭を行つたものは恐らく天下に初めてあらう。

○
此の奇特なる百僧供養の記事が大阪の各新聞に掲げられるや、それが聽て滿
洲の兵隊の目にもこまり耳にも傳はつて非常なる感激を與へた。

中でも當時錦州にあつた野砲八聯隊第二中隊の岡田少尉は此の全身血を熱に
燃えた小母さんの行爲に深く感激して、早速長文の感謝狀を寄せて來た小母さ
んが其後其熱血に一層の油を注がれたのも無理はない。

○
それから間もなく、慰問品は山の如く買ひ集められた、凡そ兵隊が戦地に於
て最も慰められる品々はあらゆる心づかいによつて遺憾なく集められた。そし
てそれ等の品物は皆な野砲兵第八聯隊の第二中隊の將兵一同に宛て、送られた

子供の誕生日だといつては又送り、盆が来たといつては又送り、今でも小母さんの家には澤山の慰問品が山の様に買ひ集められて次々の便を待つてゐる。

○

それでも小母さんは慰問品を送つただけでは、さうしても満足が出来ない、自分が暇な身体なら、自ら満洲まで乗り出して働きたいのだが、それも出来ず、自分の子供もお國の爲に盡させたいが何分まだ六歳の幼児で問題にならない。何か手つさり早くお役に立つものもがなと考へついたので軍用犬だ、それで早速シエパードの小犬二匹を五百圓を投じて買求め、日夜其成長を楽しんでゐた。

適々昨秋大防附近の大演習で荒木陸相が大阪へ乗り込んだのを幸ひ早速人を介して陸相に面接し其犬を献上して

「是非此犬を一日も早く軍用犬に仕立て、私の代りに満洲で働かしておきなは

れ」を願ひ出た。

陸軍大臣も大いに感激して、早速之を聞き入れ今では其犬は東京へ持ち歸られ、某所で軍用犬としての訓練を受けてゐる。

○

小母さんは自分の身の上に就しこんなことを語つた。

「私は五年前までは幼い子供をかへて、女中奉公してやつと暮してましたんや。それが或日のこゝ其當時の陸軍大臣宇垣大將さんが大阪へお出でなはつた時私がお給仕に出て働いた事かおますが、其時大將様から

「お前は奉公なごをしてゐるよりは自分で何か商賣を始めて獨立した方が成功する」こゝいやはりました。

それを信じて早速大阪の天王寺で關東煮（おでんや）を開業し、夜も晝も殆んど寝ずに夢中になつて働きました、それが不思議にあたりまして漸く今日ま

でになる事が出来ました。』

○

小母さんの身體には手にも足にも、背中にも所きらはず大きなお灸の跡が痛々しく残つてゐる

これは何かの度に無理をして弱つてはすえ、感激してはすえ、自分でも「名譽の傷痕」だこいつてゐる。

小母さんの眉宇には何處か非凡な閃きがある。

第一線を慰問した兵隊婆さんの感想

橋本榮子女史は滿洲醫科大學教授橋本博士の母堂で、事變勃發當初から銃後の第一線に立つて皇軍慰問に當り滿洲はもとより内地に於ても宣傳せられてゐる有名な奉天兵士ホームの「兵隊婆さん」である。左記は同女史が昨年九月か

ら十一月にかけて前後二回に渉る熱河方面及北滿東滿方面の皇軍慰問旅行に於ける感想の一端である。

◇兄さんにおコタを

北滿の或場所で一人の兵隊さんに郷里の妹さんから手紙が來てゐました。

「オ兄さん滿洲はもう随分御寒い事でせう、その中に御奉公していらつしやる御兄さんに送れる事なら暖い御飯ごコタツを送つて上げたい」ミ手紙にありました。これを見て知らず知らずに泣けて來たのでした。小さい妹さんにしてこの通りです。私はその時「何卒親御さんに訴へるミ同じ氣持で貴方方の母であり妹姉である私達に訴へて下さい必ず及ばず乍ら力になります」ミ申しますミ居並ぶ兵隊さんは皆泣いてくれました。それを見て「私共は、慰問して朗にして上げるのが却つて皆を泣かしてすまなかつた」ミ思ひましたので

夕食後みなさんミタコ遊びをして遊びました。

◇山上の墓

古北口に行つた時でした。険しい山の上に戦死者のお墓がある。聞いたので、お婆さんには登れない。云ふのを無理に登りました。生きて働いてゐる兵隊さんばかりを慰問するのではない。立派な戦死をして下さつた兵隊さんの霊を心から慰める事も亦私達の務と思ひます。澤山のお墓がずらり並んでゐるのを見て戦死された當時の有様が目に浮んで来て泣かずにはおれませんでした。私は手を合はせて心から御禮の言葉を申しました。「お婆さん有難う。私達は護國の鬼に化してゐます。今貴方方の真心からのお弔を受けてこんな嬉しい事はありません」ミ咽び泣いてゐる聲が、私の心にはつきり聞えて來ました。

◇白城子の五勇士

嚴寒にアンペラの上でごろ寝をしてゐる不眠不休の勇士の方々を實際に見まして、全く泣かずにはおられません。しかもこの勇士の方々が美しい心持で戦友の霊を弔ふ情景に出會つて感極つたのでした。忘れもしません十一月二日の夜でした。何か外の方で歌聲がすると思つて出て見ます。兵隊さんが悲壯な歌を唄つてゐるのです。その歌は十月半頃名譽の戦死を遂げた白城子の五勇士の霊を慰める爲毎晩就寝前に皆さんで合唱するものでした。

◇眞の母性愛を

警備隊の人に小學生の慰問文を上げましたその中に「兵隊さんごうか爆弾三勇士の様に死んで下さい。僕も大きくなつたら兵隊さ

んになつて御國の爲に御奉公します」ごありがとうございました。これを見た兵隊さんは涙を流して

『この子供は本當によく云つてくれた。自分はこの氣持で御奉公する。上陛下の爲は申すまでもなく此の神の如き生徒の爲にも私は死んで御奉公する』ごしつかり私の手を握りしめて云つて下さいました。

私達はこの子供の爲、この兵隊さんの爲本當に母性愛、眞の母性愛を以て今後益々御奉公せねばならぬと固く固く決心致しました。

『兵士と母』終

昭和九年四月二十日印刷
昭和九年四月二十五日發行

定價金十錢

編者 陸軍省つはもの編輯部

つはもの叢書(8)

發行者 東京市麹町區九段一丁目五番地
帝國在郷軍人會本部内 高崎 吾一

(兵士と母)

印刷者 東京市麹町區車町四番地
小林 又七

發行所 東京市麹町區九段一丁目五番地
帝國在郷軍人會本部内 つはもの發行所
(振替東京二〇〇七番)

賣捌所 大阪市浪速區惠美須町二丁目五十番地
大阪圖書株式會社
(振替大阪四二七七〇番)

(5) 史實物語 嗚呼六烈士

日露戦話中の異彩!! 北滿の吹雪に散つた横川、沖等特別任務班六勇士の悲壯哀烈の長篇物語

(6) 史談挿話 日露戦役の思出

盡きの思出、溢るゝ感激!! 日露戦役に於て爆發したる祖國愛の熱血は燦々として全紙面を彩るゝ感奮、教育の絶好資料

別冊漫畫 笑倒兵

輕妙なる筆致にて兵營川柳を漫畫化するつはもの獨特の珍風景、ユーモアのオーケストラ慰安百パーセントの好著

(7) 或る兵の手記

滿洲に上海に轉戦從軍したる一兵士の伴らざる戦闘記録であり、陣中生活の眞情をあらゆる角度から描き出した名篇である

(4) 異聞と秘話 兵營の横顔

兵營生活の赤裸々な點描、戦友の情誼、ユーモア等感激と興味に充ちた兵營文學

(3) 美談 皇軍の精華

血あり涙ある皇軍將兵の眞面目を如實に傳へる戦場美談

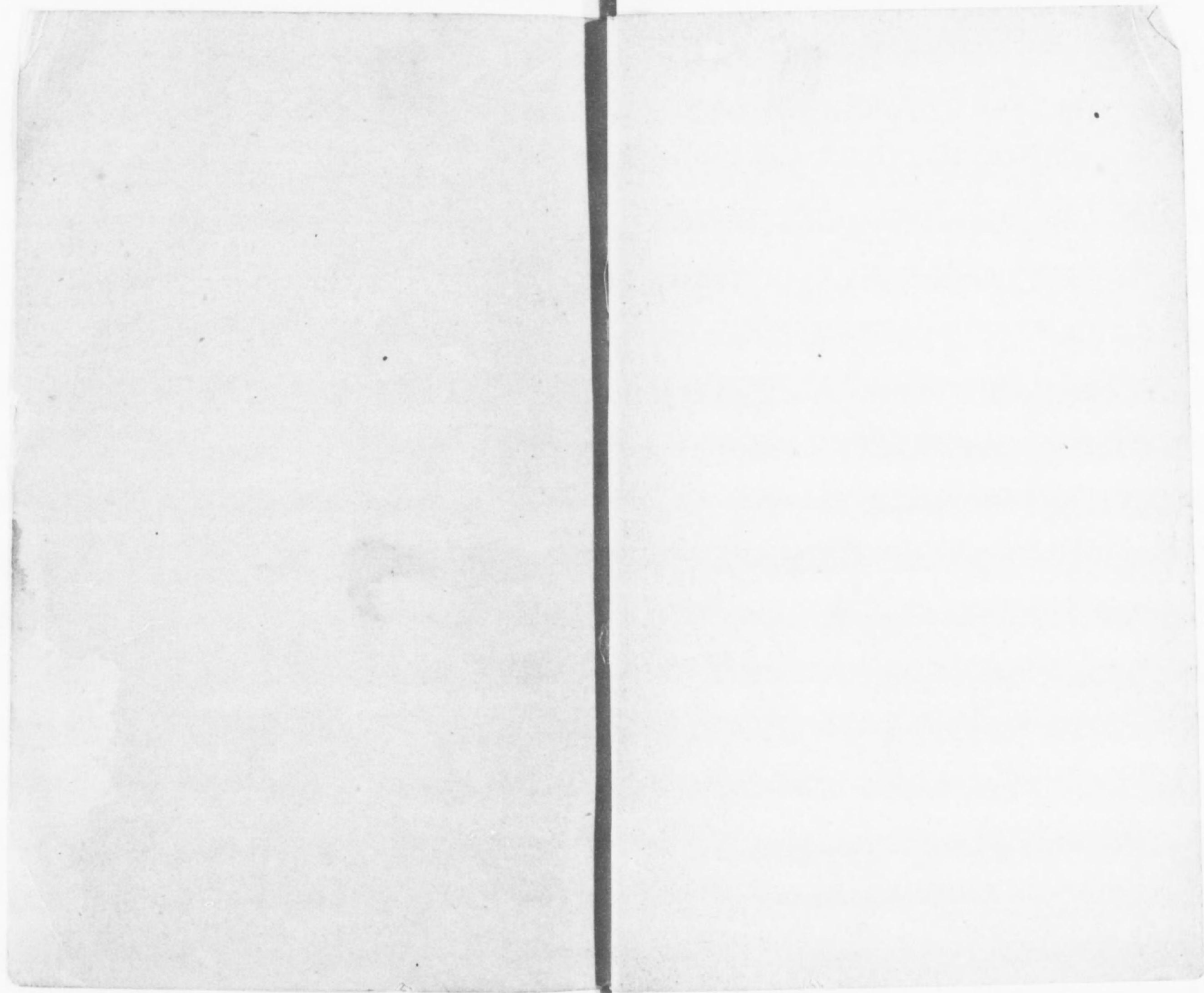
(2) 逸話 名將の片影

當代に於ける名將軍百名の珍しき逸話の斷片、何れも寸鐵的教訓を含み興味津津たる得難き資料。(陸軍省金子空軒著)

(1) 小説 小血の叫び

一青年學徒が戰場に臨み魂の奥底から軍旗の尊嚴、軍旗即天皇の信念に目醒める熱烈なる思想小説。(參謀本部田中中尉著)

◇へ民國全を書叢のもはつ◇



終

